明治四十四年九月一日發行（每月一回一日發行）（八月二十八日印刷納本）
明治四十二年三月廿九日第三種郵便物認可

新女界

第參卷 第九號

東京 新人社 發行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

新女界第參卷第九號目次

◉社説
温情 安井哲
◉講壇
向上の動機 海老名彈正
◉想苑
◉常樂の生活 二宮貞子
◉女子農業教育に就て 長崎發生
◉病床雜感 額賀生
◉避暑地より
△避暑日誌 海老名みや子
△呑氣な生活 元良よね子
△赤城記行 九里原生
△可愛らしいお手紙 一記者
◉黄昏の海 大石秋華
家庭
◉子女教育に對する母の務(其十五) 海老名みや子
◉家庭改良瑣談 谷津直秀
◉家庭に於ける父親の責任 一記者
◉摘草集(新聞雜誌瞥見)
隨感
都より田舍の友に なでしこ
編輯だより
◉挿畫 有田四郎
◉同 栗原あや

毛髪の惡臭は交際上の不覺紳士も奥さんも嬢さんも香りよき千代田香油に限るとの高評盛んなり

定價
七十錢
卅五錢
廿五錢
十七錢

スワン石鹸

純白で湯水に浮き價安くて品の良き英國製スワン石鹸は全國の藥舖小間物店化粧品にあり

英國製
スワン石鹸
日本一手販賣
東京馬喰町四丁目
山岸三之助
電話浪花一三七九三
振替口座一九九七八

◉女子師範學校四ヶ年の課程と一年半にて獨修せしむ ◉毎月二回發行

女子師範學科講義錄

新學期開始

見本付會則申越次第進呈 ◉講師東京女子高等師範の教授教諭十數名 ◉此際入會特典あり

◉男子をも員外生として入會を許す ◉東京小石川區大和町九番地 電番一三〇六 振替一七〇二二

帝國女子師範學會

婦人界唯一の
週刊新聞

婦女新聞

女子教育界の
公共機關

毎週金曜發行 ◉創刊以來滿十一年

定價 一ヶ年前金一圓六十錢 △半年八十四錢 △三ヶ月四十三錢 △全國無郵稅 △三ヶ月以下注文謝絕す

一般の婦人にして婦女新聞を讀まざる者ありや
若しあらば時勢に後るゝ事を顧みざる人なり
女子教育家にして婦女新聞を讀まざる者ありや
若しあらば其の職務に不忠實の人といふべし
婦人問題研究者にして婦女新聞を讀まざる者ありや
若しあらば其の目的を達する事能はざるべし

東京市小石川區大和町九番地
(電話番町三〇六) (振替三八〇七)

婦女新聞社

羽仁もと子主筆

婦人之友

九月一日發行 第四號 一冊金十五錢 郵税一錢五厘 （六冊前金九十錢 十二冊一圓七十五錢） 郵税共

◎家庭に於ける婦人の職業問題……羽仁もと子

▲理想の生活花子の巻…羽仁もと子
▲近來の一佳話……久留島武彦
▲昔の趣味と今の流行…岩村透
▲美服、家を亡す……安富衆輔
▲子供の結核に就て 醫學博士 加藤照麿
▲家人の小遣は如何にすべきか
▲女中訓（賢い女中と愚かな女中）

▲名畫の子供……倉橋惣三
▲歌ものがたり……遠山稻子
▲鉛筆畫の描き方……大下藤次郎
▲假名の習ひ方……星野天知
▲文藝その月々……河井醉茗
▲フロスの水車場……松本雲舟
▲立志傳に入るべかりし女……
▲神經痛治療の經驗……
▲飽の料理法……
▲家政問答……羽仁もと子
▲讀者消息……

◎良妻賢母とホーム……三宅雪嶺

▲我家の家具保存法…田中米子
▲着物の繰廻しの上手下手…延子
▲服裝に就てのきまり 水町たづ子
▲二十七錢で出來る帶留…
▲ひね蠶豆を軟かく煮る秘訣
▲二つの鷄卵で十二のワップルを作る
▲九月の惣菜（三十一日分の獻立）

▲葡萄（石川寅次筆）……
▲溪流（大下藤次郎筆）……
▲慈母觀音の圖（狩野芳崖筆）……
▲家庭の月見（畫報）……
▲山脇夫人と愛甥愛孫（畫報）……
▲衣服整理法講習會（畫報）……
▲虫鳴く宵（畫報）……
▲とんぼとり（畫報）……
▲姉と妹（畫報）……
▲子供の一日（畫報）……
▲初秋の田園（畫報）……

◎北海に投身せる可憐の三少女……綱島佳吉

東京小石川雜司ヶ谷町 婦人の友社 振替口座東京一一六〇〇番

「かれこれと迷ふことは勿れ
完全無缺なる大學目藥あり

大學目藥は帝國醫科大學病院の處方に基きし貴重の製劑にして●はやり目●トラホーム●星目●のぼせ目●かすみ目●血目●疲目其他眼病一切に驚くべき奇効あり●全國各地有名の藥店にあり

新人第拾貳卷第九號目次

（九月一日發行）（定價金十五錢）

◎社説
◎朝鮮人の使命

◎教壇
◎基督の僕と友　海老名彈正

◎想苑
◎自然主義か理想主義か　鹿子木員信譯
◎天才論　富永德磨
◎基督教の眞髓と宗教哲學　久布白直勝
◎教派合同の史的發達　小平國雄
◎イスカリオテのユダ　森脇白夜

◎聖書講義
◎馬可傳　海老名彈正

◎雜爼
◎分れの旅路　内ケ崎作三郎

◎内ケ崎君を迎へ且つ思潮界の近情を報ずる書　栗原基

◎時潮小觀
◎時代思想の變遷　村井致至氏
◎何故に耶蘇教は日本に勢力なきか　片山潜氏

◎文藝小觀
◎眞宗の繁昌し來る所以　村上專精氏

◎時評
◎八月の小説と評論
◎内ケ崎作三郎君を迎ふ
◎モルモン宗と天理教
◎日本排斥の主因
◎何故に大文學は出でざる乎
△新刊紹介　△次號豫告　△編輯だより
◎挿畫　有田四郎

發行所　東京市小石川區林町四十三番地　新人社
（電話番町二五四四番 振替口座一四〇〇五）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

第参巻第九號

温情

安井哲

責任とか義務とかいふやかましい觀念にのみ驅られて、毎日追ひかけて來る仕事と奮闘しつゝある生活狀態には、身にも心にも少しの餘裕を存しません周圍の人々に一言やさしい言葉をかけやうとするとまだ彼の仕事は出來ぬかと叫ばれる樣な氣がして、唯器械の樣にぐるぐる廻はつて、美くしい花を眺めて心を柔げる暇もなければ、清い月を見て心を澄ます時もありません。かうなつては人間の心は唯荒ぶるばかり、智の人、意の人、活動の人とはなり得ても、情は次第に枯れて行くのであります。私は此夏休みに知ると知らざる多くの人々から訪問を受けました。常ならば一口言うては立ち上がらねばならぬ忙しい身が、今は日曜日さへ忘るゝ暢氣な生活なので、心ゆくまで打解けて話しする事が出來まして、荒れすさんで居た感情も少しづゝ温められて、やう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

やく人間に立ち戻つた様な氣が致します。

語つた人の過半は不幸の人々でありました。或は親を失ひ、或は病める近親を有し、或は貧と戰ひ、或はある煩悶を有する人々であります。かゝる人々がかゝる苦痛を心に秘して、人の子として、人の姉妹として、又教育ある者として耻づかしからぬ様にと奮闘する健氣さは實に可憐であります。彼等の心を知らぬ周圍の人々は、時には無思慮な言葉を吐いて不知不識彼等を苦しめる事もありませう。彼等の悲しみも知らずに、彼等の前に吾幸福を喜ぶ者もありませう。勿論是等は惡行とは申せません。何故ならば他人を苦しめんとして故意に爲した行爲でないからであります。さりながら之れを受くる彼等の心には人知れぬ苦痛を感せざるを得ますまい。之れを以て考へれば、吾々は不知不識他人の心に大なる影響を與へて居る事に驚かるゝのであります。

吾が近親や朋友知己に對して、吾々が同情と好意とを有する事は普通であります。併吾々は特殊の關

係を有たぬ人々に對して、常に溫情を有する事は最大切で而も之れは容易い事ではありません。自分のみを常に考へて居る人は其後に友の在る事を忘れ、自分と朋友とのみを考へて居る人は、其傍に他人の在る事を忘れるのは常であります。近親や朋友に對しては假令情に於ては親切にしたくないやうな場合があつたとしても、義務の觀念に制せられて、意志が親切の行爲を强ふる事があります。―勿論かゝる情のない形式的の道德行爲を眞に親切といはれるか否かは問題でありますが、― 然るに不見不識の人々には吾より進んで好意を示す責任もなければ義務もない、他人の幸不幸を聞き糺して、他人の生活に立ち入るのは心ある人々の愼んで避くべき事であるといふ人々もありませう。それは其通りであります。

併吾心が溫情に充ちて居れば、之れに觸れた人は、慰めの言葉を聞く前に既に心が柔ぎます。溫情の前には無理に心の悲しみを包んで笑顏を作る必要もな

く、又之れに接して悲觀の度を加ふる事もありません。其人が恰も吾れと同様の境遇にあるかの如く、吾より進んで其心に休息を求め、其心に慰安を求めんとするやうになるのであります。善を爲さんとの意識もなく、他人に親切を盡さうと努力する事もなくて吾に接する人々が自然に慰安と同情とを感ずる事が出來たならば、如何に喜ばしい事でありませう。併之れは容易な事ではありません。

不完全な身心を有する吾々は、自分自身にも種々の悩みがあります。又時としては此世の榮華に心を奪はれて周圍の人々を盡く忘るゝ瞬間もあります。或は又事務の奴隷となつて、全く默想の生活を離れる事もあります。かゝる中に在つて温情を蓄積する事は實に難い事であります。併しながら吾々は常に近親や朋友にのみ取圍まれて居るわけにはまゐりません。心の知れぬ他人の中に生活せねばならぬ事もあり、時としては我を敵視する人々とも共に働かねばなりません。此間に在つて奮鬪する者は、實に多大な慰藉を求むるのは自然で、そして其慰藉は温情より大なる者はありません。如何なる困難な生活でも、温い空氣の中ではそれほどの苦痛を感じませんし、如何に幸福であるべき境遇でも冷やかな空氣中には却つて苦痛を感ずる者であります。實に人を活す者は温情であります。情の冷やかな者は自分を殺すと同時に他人をも殺します。其故に人として貴いのは義務とか責任とかの觀念に驅られて、機械的に爲す道德的行爲でなく、心の奥底に蓄つて居る温かな情から溢れ出した自然の優しい行爲であります。

吾々は人心以外に愛の泉を求め得ますけれども、此社會に人と共に生活する間は人間にも亦之れを求めざるを得ません。故に吾々は自他の幸福のために心に温情を貯ふるだけの餘裕を作る事が肝要で、智識以外、職務以外、金錢以外、名譽以外の或物に心を傾くる默想の一方面は、活動の方面と相待つて、吾々の生活中になければならぬ事であります。多忙の一日中僅に一時間、又は寸暇なき活動の最中、ご

うかして此「ゆつたり」とした餘地が心に存してありたい者であります。かくて他人を温めた心は、又他人に依つて温められ、終には獨り親兄弟ばかりでなく其周圍の誰彼と共にやさしい温かい世界に、共に悲しみ共に喜んで樂しく暮すことが出來るになるのであります。例年山水の美しい景色に接して自然の感化を喜んだ私は今年は悲しめる多くの人々に接して、將に冷えんとして居た情を温められ、人類の貴き感化を味ひ得られた事を深く感謝するのであります。

ボストンに於て目撃したことですが、小校女教員が増給運動のストライキをやつた事がある。西洋の女教員は勞働組合に加入して居つて、自ら勞働者を以て任じて居る。其他婦人を中心とする爲に起る所の家庭の紛紜は何時も男子を犧牲にする傾があるのです、之等は枚擧に暇ありませぬが、私は東の洋美風を擁護して行つて、歐羅巴の動的文明の弊を救つて行くことは、大體の大方針であるまいかと思ふ。婦人も自覺的に從順の德を守り自覺的に貞操は婦人特別の德たること猶パンを得ることの男子特別の德たるが如きものであるといふことを深く思ふ可きである。

（茅原華山）

向上の動機

海老名彈正

△大膽か遲鈍か

羅馬書の第五章の一より十一節の所は、パウロ及び時の多くの基督者が深く實驗したものを其儘表はしたのである。一體羅馬書には初めから六ケ敷い議論で持ち切つてあるが、彼の熱情と實驗とに富むパウロには、そう固くるしい議論だけでは滿足が出來ない。

そこで彼は其の議論の眞最中にも、折々其の深い實驗を挾んで居るのである。此處には神と和らぐ爲めには怎うしても信仰に依らねばならぬことを論じて初めて自ら神と和らぐ事を得たる欣喜は眞に大なるものであると言ふて居る。未だ神と和がぬ前の眞心の要求と、自分の肉體の慾情とが相鬪ふ時には、猶ほ尊い向上の精神は起り兼ねた。尤も向上心があればこそ、惡と戰ふ勇氣も起つたのであるが、餘りに惡が大なれば、戰敗けをして希望が無くなる。人が此の戰敗をして來た時には一種妙な心の狀態に成つて、一見極めて大膽のやうに成るものである。併し是は尊い向上心の輝ではない。實に向上心の出來る源は、眞に精神上の裕なる所に在るのである。

吾々から支那人或は朝鮮人を見る時に、何故あゝ

大膽に構へることが出來るのであらう乎と駭ろく事がある。或る朝の事、京城の横町を通つてゐると、多勢の勞働者などが群をしてゐた。夫は丁度煮賣屋の前であつた。一體朝鮮人が喧嘩をするには唯口先きばかりで、滅多に腕力沙汰には成らぬが、怎うしたのか其の煮賣屋の主人が、一人の男に向つて思ふ程力を入れて其の男の眞正面を三ッ四ッしたゝかに撲つた。然るに打れた男は更に手向ひをもせず平然として打たるゝが儘に任してゐる。是は吾々日本人から見れば一向合點の行かぬ所である。其の男は恐らく喰逃でもしたものと見えるが、若し是が日本人なれば初めの中こそ凝つとして居ても、仕舞には死者狂に成つても爭ひ懸る、然るに彼は固より平然として默然、又彼の仲間も頓着なく之を傍觀してゐた。是は膽がすはつてゐると云ふのか或は神經が遲鈍いのであらう乎。

△耀の面と暗黑の陰

彼等の生活狀態を見れば、彼等には深い高い希望が莫い。餘りに低い所にまで落ちた爲めに向上といふ光明を失つたのである。日本人なれば一つ打たれても大なる恥辱と思ふ、二度と顏を合せない程に羞かしく思ふ。併し彼等には恥辱はない。神經が痲痺してゐると見える。故に彼等の質素と淳朴とは偶々彼等に向上心なくして小成に安ずるといふことを表はして居る。故に彼等の平安は、動物的生活の平安である。彼等の大膽は豚や蟇の大膽である。彼の大逆事件の裁判に關して、初めから終まで是に關與した人の話に、彼等の決心には實に驚ろく、些も未練がましい思を持つて居らぬ。言を左右にして曖昧にせうなぞとは少しも思つて居らぬ。實に斷乎たる態度であつた。彼等の中には佛敎を信ずる者、基督敎を聽いた者もあつたが、就中面憎いまで落ち付き拂つて居た者は彼の唯物論者であつた。併し彼等の顏色を透して何とも言へぬ暗い影が動いて居た尠しの耀が無かつたとの事である。さもある可き事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

と思ふ。彼等の精神を支配する所のものは、唯恨骨髄に徹したといふ所の黒い陰でなくて、來世の光明がない。此の暗黒の心には慈光の反射はない。

吾等の面に輝の發する爲めには裕とりとした麗はしい精神がなければならぬ。最一つ言ひ換へると尊い向上心が無ければならぬ。昔の多くの殉教者の面は耀いたと傳らへる。彼のステパノが石にて撃ち殺されたる時には、其の顔が天の使の如く輝いたとある。

彼曰く「視よ我天ひらけて神の右に人の子の立てるを見る」と。彼の心には大なる向上心がある。清い崇高い美はしい天を仰いで居る。故に「主よ此罪を彼等に負はしむる勿れ」と祈つて、彼は決して之を呪咀ふ事をせない。此の邊の精神狀態と彼の朝鮮人の無抵抗主義或は唯物論者の心的狀態との間には非常なる相違が在る。

△患難にも欣喜あり

此の大なる相違は果して奈邊に存する乎。是は闇か嵐か雨か乃至は遲鈍か痲痺かである。其處に輝の靈光はない。然るに彼は朗かである裕である而も打ち勝ち難い威嚴が自ら俱はつて居る。そして愛の心の輝が太陽の光のやうに輝き亘つて行く。此處には崇く尊い、眞にして又善美なる天地の父の慈光を仰いで進む積極的な精神の働が、恰も閃のやうに吾等の心を貫ぬいて行く。是は唯罪の許を乞はんが爲めに、或は己が苦悶を免かれん爲めに止むなく痛い足を引きづる狀態ではない。罪惡に伴ふ不安もなく又苦悶に伴ふ不平も莫い。實に神と和ぐ事を得て恰も近しい友と友とが語り合ふ狀態である。斯る精神狀態を以て神を慕ふて行くのである。故に其の望む所は神の榮光、而して此の榮光に同化し得るとの希望を抱いて進む所に身心の勢力の有りたけが働いて居る、此處に所謂向上心が存する。此の向上心の動機は全く神を仰いで慕ひ行く所に在る。故に眞のクリスチャンは其の行く道が困難であつても神を慕ふ

心に變はない、假令深い谷底に陷るやうなことあつても其の抱く光は失はない、實に神代の基督者は獄裡に投せられても更らに恨む所はない。正義は彼等に在つても而も神の不公平を憤らぬ、常に患難にも欣喜をなして忍んで居たのである。洵に世の常の人とは全く違つた所がある。何故であらうか。即ち神の榮を望む人には患難で寧ろ神の愛の深い事が會得出來るからである。全く世に處する精神狀態が變つて居るのである。初め信仰を起して進まんとする所は美である、然し夫よりも尙ほ患難にも欣喜を爲して進む所には更らに一段の麗はしさが有る。希望は益々輝いて向上の精神は彌々熾である。而して羞を來らせざる希望は聖靈に由りて吾儕に灌漑がるゝ神の愛によつて養はるゝが故に、腕を擦つて痩我慢を張る必要もなく、常に溫なる心を以て登つて行く。故に患難にも欣喜が在るのである。

△天國の面影も斯やと忍ばるゝ

要するに神の恩愛を自覺して常に神を慕ひ、神の榮光を望んで是に同化せんと努むる所に向上の精神が有る。斯く成つて來ると已に地上に於て樣々の現象が生じて來る。例へば我がクリスチャンは悲しき人生を見ずして此の人生を樂しく見る。先づ家庭の樂しみを自覺する。實に親子兄弟夫婦などの間に自づと起る溫い親しみと近しい團欒の樂に、美しい尊い神の恩惠を感ずるのである。從つてホームを憶ふ情は寔に密にして、恰も天國の面影も斯くやと忍ばるゝ程に暢々して來るのである。若し夫れ人々の希望する如く、從來の社會が一變して斯る樂しい家庭のやうな有樣に成つたならば、夫れこそ天國が此の世に實現せられたるにある。此くして國家は最も樂しむべきものと成つて、人々の國を思ふ心は愈々深く成る。故に人は其の生命を重ずるやうになる、そして尊い向上心が常に輝いて來るであらう。向上心と云へば己と自ら神より遠ざかつて考へる傾が有るやうにも思はるゝが、さうでない。元々向上心は唯

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

神を慕ふ所から起つて來たものであるが故に、此の人生が神より離れてゐるか否かは、爰には問ふ所でない。只クリスチヤンの向上心には神の榮に同化し奉る事が出來るといふ所の強い信念があるからして縦令家庭の團欒を後に遺しても、或は社會から全く離れて逝つても、吾々基督者の死には寂し生がないのである。此る向上心の内容に豊なる或るものゝ存するといふ事は、誠に當然なる事であつて、斯る向上の動機に特別なる強さがある所以である。

「未だよく人に事ふる能はず焉ぞよく鬼に事へん」或は「未だ生を知らず焉ぞ死を知らん」とは孔子の言である。努めて現世的修養を採つて來世を卑しむる結果は、今日の朝鮮の無理想を作り、人心の萎靡と遅鈍の因を為したのである。

△我儕も亦昇り行かん

此の如く理想なき為めに動物的生活に甘ずる者の外に、現世を蔑視し、或は之を火宅とし穢土として唯西方浄土の欣求の為めに日々に念佛三昧に耽る人もある。是も一の向上は向上であるけれども　患難にも欣喜を為して進む向上とは大に異なる。吾等が神を慕ふての向上には火宅もない穢土もない。唯神の愛と神の命とあるのみである。故に若し此の世が穢土なれば自ら之を浄むるに竭す其の事が、神の光榮に自ら参ずる所以である。茲に無限の幸福を自覺するが故に、既に此の世ながらの悦樂がある。かるが故に吾儕は家庭の團欒を樂しみ、社會の交はりを喜ぶ中に神の恩愛を知り得るのである。されば我儕が進み行く時には、遅鈍と冷膽とより來る膽力ではない。實に涙ある美はしい温い情念に動さるゝ神の國の義である。來る人々は間違つた修養と心得て、平然として死に冷然として獄に投せらるゝ事を以て最後の到達點とする。此る冷然と平然とは心に餘裕ある如くにして却つて及ばないのである。

吾々は何處までも眞善美の神を仰いで進む者である。此る大なる望に人の最も高く最も潔い方面は發

展し行くが故に、吾儕が人生の解釋は凡て此の尊き向上心に係つて來るのである。昔或る一人の殉教者が獄中に投ぜられた。暗い冷たい石の壁に取り圍められて自づと世の恐ろしさに思はず戰慄した。處が暫らくにして神を仰ぎ基督の事に憶ひ至つた時に、忽ちにして其の冷酷なる獄屋は樂園と化した。而して愈々刑に處せらるゝ際、彼を率き出した兵卒は其の耀ける面貌に、實に尊い微語を聞いた。而して翌日は彼自らが死刑に處せらるべき信仰の告白を爲したと傳へる。何たる清い而も強い精神の輝であらう人をして憤慨の餘りに興起せしめるのではない。實に尊い天の父の慕はしさに身の死するをも忘れしむるのである。吾儕も亦昇り行かん、神は其の榮光に入れしめんとて吾儕を待ち給ふ。

常樂の生活

二宮貞子

一

私は學生々活を終つてからまだ間もない者で御座いますが、此の世の中は學生時代に見たのとは全然異つて居りまして、學生時代に懷抱して居りました理想や希望が、思ふ通りに實行が出來ぬのを見まして、誠にはがゆく感ずる事も御座いますが、然し經驗と實行とが伴はぬ考は、全く空論に過ぎないと云ふ事を感ずるので御座います。學生時代に先生や先輩から其經驗談と實驗談を聞きましても、其當時には何うも意味がよく解らぬ事が多う御座いましたが之は學生々活と此世の生活とが違ひまして、思もつかぬ程其樣子が變つて居ります事に原因して居るのでせうと存じます。私共の眼から見ますと此の世の中は學生々活と比較して非常に不秩序で不整頓で、折角學校生活に於て養成して來ました良い習慣思想

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

は、世の中へ出れば、めちや／＼に壞されて仕舞ふ事が澤山御座います。そして又折角永い年月を費して學得しました自分の智識を、其儘表はすべき適當な場所も與へられぬ事が度々御座いますと、直ぐ其所に不平が起り、はては失望落膽して氣力を失つてしまふか、又は所謂操守を捨てゝ世の俗惡な風潮に降參してしまふと云ふやうな、あはれはかない有樣になるので御座います。

然らばかう云ふ事情に制せられず、常に樂しき愉快なる心を以て生活する事が出來るかと云ふ問題で御座います。想ふに樂しき生活と云ふ事は自己の爲めにのみ生活する事でなく、神の爲め人の爲めに生活する事であります。故人の說に「凡ての道德の中で貴きものは常に喜ばしき事である、若し道德が吾等をして不愉快ならしむるものなら、それは必ず誤謬である」とありますが、然し私共は如何しても境遇に制せられ勝ちのもので御座いまして、例へ如何なる境遇に置かれましても、常に樂しんで生活すると云ふ事は實に六かしき事であらふと思ひます而して私共は必ずしも自分の滿足する位地境遇に置かれるとは限らないのでありまして、或は多くの場合にては却つて不滿足な場所を與へられるのが、人生の實際で御座います。夫れ故私共は如何なる場合に於ても常に喜ばしき心を持ち、どんな境遇に處しても自ら晏如たる生活を送るために、私共は始終修養をして行かなければならないのであります。修養のない處には必ず喜びはありません。私共は常に喜ばしき生活を送り得るやうに、自分を形造つて行く事に修養を積ねばならないのであります。其修養と云ふ事に就て日常私が心懸けて居ります事を申しあげて見度いと思ひます。

二

一、日々の賜を充分に感謝して受ける事。

凡て將來を考へる事は誠に大切なことで、之れあるが爲めに多くの計劃や實行が生れ出るので御座い

ますが、空な望を明日にかけて、今日の苦しみを免れやうと思ふのは、誠におろかな話で御座いまして今日の樂みがあればこそ、明日の樂みも待たれますので、今日が樂しくないなら、明日の樂も覺束ないものであらふと思ひます。

二、與へられたる運命に滿足して其義務を盡す事

不滿足な感念は大概自分が茫然して居るので起るやうであります。時々の機會をよく捕へて之を利用しますれば、不滿足な觀念は漸次なくなつて來るものであります。全世界の歷史を見ましても、大人物と云はるゝ人は、小さな機會を最もよく利用した人であります、私共の日常の生活に於きましても、心してさへ居りますならば、萬事につけ機會は始終ありますもの、之を捕へて利用すればする程　自分の境遇や位置は改善せられて行くのであります、只徒らに不平を並べ愚痴をこぼして居ては、何時まで經つたとて決して樂しき生活に入る事は困難であります。又與へられた自分の義務を盡すと云ふ事が、私

共を樂しき生活に導く一つの道であります。現在の義務を盡さなければ、もう永久に盡くすべき時期がないのであります。今日の義務を怠つたと感ずる心は、どれだけ私共の愉快を殺ぐか知れません。今日一日を樂しく送り、明日も亦愉快に迎えやうと思ふならば、是非共現在の自分の義務を落ちなく盡くす事が大切だと思ひます。若し此一日に於て其義務を盡す時を失つたなら、永久に取りかへす譯には行かぬのでありますが、然し此時間を失ふと云ふ事に就て一寸申上げて置きたいと思ひます事は、之には空費した時間と妨げられた時間との差異がある事で御座います。時間を空費すると云ふ事に就ては今更申す事もありますまいが、妨げられた時間の爲めに自分の義務が盡せなかつたと云ふ場合が、日本の家庭では殊更に多く起つて來る事實でありますが、然し之には私は失望する必要はなからうと思ひます。例へて申しますなら、讀書すべき時間に偶々友人の訪問を受けました爲に、讀書が出來なかつたと云ふ場

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

合も起りませうし、又は專心に家事に從事して居ります時に、門口に立つて物乞ふ乞食のくどくど云ふのに時間を取られたと云ふ場合もありませうが、然し斯る場合におきましては、豫定の事は或は怠つたやうな姿になつて殘つて居りましても、友人の來訪によりては豫期せぬ種々の有益な智識を得る事も出來ますし、乞食との應答によりましても相應な教訓は得られますから、强ちに妨げられた時間のためと云ふ事は私共に大した苦痛は與へぬ事であらふと

思ひます。要は唯ごんなつらぬ小さな仕事でも、よく盡して行くと云ふ點に秘訣はあるだらふと思ひます。忙しい時に一寸御手傳なご致した時に「あなたにそんな事をして頂いては濟みません」と云ふ御言葉を聞くことがありますが、之は考のない言葉であると思ひます御上品な仕事をするからえらいと云ふ譯はありますまい、どんなつまらぬ仕事でも心よくすると云ふ精神が實に尊いものだと思ふので御座ます。

三、利己心を捨てる事。

思ひ煩は大概自分の事許りを考ふる事から起るやうであります。夫れは一度び利己心を離るゝ事が出來ますならば、煩悶はなくなるのであります。若し何等かの方法によりて神のため人のために働く事が出來ますならば、煩悶は全く其影を隱すであらふと存じます。

四、美しき價ある友となる事。

友情と云ふ語は私共に美しい、情け深い、一種の床しさを傳へますが、然し何等の覺悟がありませんでは、失望の時が來ないとは限りません。多岐多樣な人生におきまして友の情をのみ待つといふ事は、

決して安全な道ではありません。犧牲のない友情は望ましいものではなからふと思ひます。私は友となつて貰ふと願ふよりも、自分が美しき價のある友となる心がけが肝要だと思ひます。

五　神に對する信仰。

私は信仰といふ事を智識的に申し上ぐるのではありません。只基督の御足の跡をふんで行く事によりて、私共の精神が漸次發達する事を信じ、たゆみなき生活を送りますならば、此處に初めて完全な常樂の世界が開けて來るのであります。之こそ眞實の樂み、永遠の樂みであらふと思ひます。（談）

女子農業教育に就いて

農商務省種畜牧場に於て
長崎發生

（一）　兒童の感化

「子供は人の父なり」

とはウォルズォースの詩に見ゆる誠に深遠な言葉である。赤坊も母の乳房にすがつて居る間は、涎を流して無邪氣で腕白である。乍併夫が不知不識の間に成人となつては、人の父と呼ばれ母とも呼ばるゝ樣

になるのである。世界の運命も確に母の抱いて居る赤坊に由て定ると云ふも敢て過言ではあるまい。

誠に子供の教育の盛大なると否とは、其國の未來をもトすることが出來やう、彼のフレーベル先生も「子供が五歳になる迄に其子が一生涯中に學ぶ新しい事は、皆な學び盡す」と論定して居るが如きは確に事實であらう。子供の活動々作ばかりは思ひもよらぬ程盛なものであり、其間に湧き出づる受感力も亦大ならざるを得ない。

（二）　兒童の動作實驗

其處で或る大學の先生が子供の活動々作を見るために、四五歳になる自分の子供が一日に如何程の擧動をなし、どの位言葉數を語るかを試驗して見た、其記錄に依ると子供は朝六時廿分に起き夜八時にねるまでの間から、晝寢の一時廿分間を引去りて、結局十二時三十六分間に一萬五千二百三十四の言葉を語つたとの事である。元より之を實驗するには子供が起ると直ちに兩親は夫れ一方に、子供の擧止動作に注意して、寢るまで目を離さなかつたので、夫がために兩親は勞れて前後も識らず寢てしまつたとの事である。

（三）　母よりの感化

斯樣に一萬五千二百三十四と聞いてさへ驚ろかざるを得ないのに、其外口の中で言ふた言葉が何程あつたか、わからなかつたとの事である。それによく注意して見ると母の言葉に生寫しだとの事である。誠に母たる者は如何ばかり子供の教育に、その責任のあるかが了解される。母が鎌を持てば子は鎌を持つ母が鋤鍬を取れば子は鋤鍬を取らんとするのである誠に母の動作は總て子供の感化となるのである、して見れば無學の乳母に子供を托すが如きは危險この上もない。まして惡しき子供と遊ばしむるが如きは、最も危險な事である。夫れから子供が七歳となれば總じて學校に通はす事である、夫れまでは一般に母の許にゐるものとせねばならぬ、譬ひ學校に通ふ子供にしても、學校にいくら長く居た所で五

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

六時間である、其外に矢張り家庭に居る事であらう。して見ると子供を保育するの責は、獨り學校のみでない、家庭に於る母の任また大ならざるを得ない、誠に母よりの感化の偉大なるを思ふべきである。

（四） 學校教育と家庭教育

其處で勞働者のために或は農者のために、或は貧しき人のために、四歳位からの子供を集めては教育し始めた人がある、しかも親の身代りとなつて、子供らしく遊ばせ子供らしく智慧を研くことに力めたのである、その人は有名なフレーベル先生である。之が今日の幼稚園の始りである、其起原に依れば決して今日の如き富貴者の專有物ではなかつた、誠に今日の農村に於ては、フレーベル主義の幼稚園のやうなものがほしいものである。

さて七歳となれば小學校に通はせ、夫れから成人になるまでは、相當の道を蹊むことである、之が今日の教育の方法であらう、多くの親達は是れ等の教育に滿足して殆んど學校任せの狀態である、成程それは良いかも知れない、乍併子供は殆んど家に居る方が多い、換言すれば學校に居る方が少い、夫故に學校がいくら善くして呉れた所で、家庭が相當な躾をせないでは、なんの役にも立たない。

（五） 女子農業教育の緊要

農村の男子に農業教育の必要であるがやうに、農村の女子或は將來農者の妻たらんものゝためには、矢張農業教育は必要である。將來に於てその女子に實地農業を營ましめんためにのみ、女子農業教育の必要とは言へない、實地農事に從ふと否とは別問題で、詮ずる所は、農業そのものに、一通りの知識があり、趣味を有する婦人でこそ、初めて農家の家族を能く處理し得る人であらう、主として農家の家庭を作る人として、その農業教育の緊要なるを切に感ずるのである。夫故に普通學科は云はずもがな、殊に農業の大意、家政上必要なる科目及び品性陶冶と云ふ事に就ては、大に心得ねばならぬ事であらう。

（六） 女子の農業教育と農村

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

かくも女子の農業教育の普及を主張する所以は、軈てまた確實なる農村の基礎を作る所以である。眞に農業上の趣味を有する女に養育せられたる者は、又眞によく農業を好み且つ村愛心が厚いやうである現今青年男子が丁年となると兵役に服する、一旦滿期兵として歸省するもの、動もすれば都市生活を羨みて農村生活を嫌ひ、或は農事を輕視しては、心を他に傾けんとするもの丶多きは、一は或る境遇に依るとも、一は以てその父母たるもの丶感化と云はねばならぬ。農業上の常識素養に暗きか或は夫等の趣味を有せぬ所に基くであらう。兎角虛榮に走り勝ちな女性が、或る動機と共に、本來の赤心を虛榮のために包まれ、矢鱈に都市に憧がれ、終に惡魔の捕はれ人になつて化舞ふと云ふのは、要するにそれに對する常識素養及び相當の趣味の缺乏による事である從て趣味は彼等をして勉勵せしむる事となる、其間には云ふべからざる快感の助長となるのである。農者としての人格は潜在的に其子に染傳せらる丶事となるのであるから、農者は農者としての常識と夫れに伴ふ趣味の涵養とが大切な事である、從て農村に於ける女子の、農業教育の緊要なることは言を待たぬのである。

（七）趣味と知識

日常農事を營んで居れば、それでよいとは云はれまい、實地的農業をなして居ればそれで趣味が出て來やうもない、趣味を持つには、それ相應の知識がなくてはならぬ、現に現今の農者によく農業上の趣味を有してる者があらうか、唯機械的に日々手足を動かしてゐれば、それで趣味が感せられやうか、必ずや其處には趣味と伴ふ知識がなくてはならぬ、知識の涵養は自覺を強からしめ、自覺の增長は趣味の增加となり得る、して趣味生活の間に自ら村愛心をも生じ、且つ人格ある農者たらしむるのである。換言せば、農事と戰ふ間には數多の患難に遭遇するであらう、之に打勝ちつゝ戰ふ間には自ら忍耐は生じ、忍耐しつ丶實踐する間には自覺をして益々健全ならし

自覺は軈てそれに對する趣味の助長となるのであるそして實踐の間に新しい知識と強い信念とを涵養せしむるのである、夫故に農業と云ふものを知ると言ふ事が基礎で無くつてはならぬ。

　事實上もしその父母にして、農業に何等の趣味なく、只田畠に動搖するものとせば、その父母にして養育せられたる者に、農業上の趣味を得せしむるとか、その價値を悟らしむるは誠に困難である、そして例令學校に於て農業敎育を授け、その敎育が確實なものとした所で家庭の如何は、實に學校敎育をして更に有効ならしむるか否かの差を生せしむる所以である、して見れば將來その父たるべき男子の農業敎育の大切なるに比して、また母たるべき女子の農業敎育の素養と常識との涵養がなくてはならぬ。

（八）農村生活と女子の品性

　フーベル氏は曾て「農業は人を造る」と云ふた事がある、田園生活は實に品性を涵養せしむるに最も適してゐる、自然と人生とは離れやう筈がない、その田園の生活の奥髄が、軈て國民性を發揮せしむる源となるのであり、女子の修養の如何が、他日家庭の基礎たるに於ては、識者は元より、常に農村にある婦人にせよ、田園生活に身を寄せし人は、夙に思はざるを得ない事實であらう、彼が自然の間に潜みつゝ總ての潜勢力を盡して勵みつゝある間に、この云ふべからざる田園の力が我等を勵まし我等を救ひ、品性を發達せしめ、家庭を作り、國民性の發揮を堅くせしむる所以なるを思はざるを得ない。

　試に目に觸るゝものは山川草木、耳に響くものは禽聲蟲語、春は耕し秋は收む、田園の天人總てこれ自然である、諺に「田園は神之を造り都市は人之を造る」とあるは、此間の神韻を洩してまた餘蘊なしと云ふべきものである、試に都市と田舍とが如何にして成立せるものかを思ひ來らば、此の感更に深大なるものがあらう、げに我が神造の田園に遊べ、高く或は低き清き自然の歌、田園を流るゝ小川の水山々を走る涼しき風は、如何に吾を慰めつゝあるか如

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

何に吾等を勵ますか、見るもの聞くもの、總て吾等が受くる唯一の福音である、之を讃美するものは、田園文學化しては更に吾等の生命とするに足る、眞善美なる宗教はこれである、田園の人は總て一種の平民的詩觀を有し自然を友とし、之に潔められ、或る希望の光と接觸しつゝある、美しき性格を涵養しつゝあるを思へ、美しき田園よ、汝は彼れに何を與へんとするや、美しき生格である、それによりて彼等が何を生産せんとするであらう、國家の指導者である、さればその指導者を保育せしむる母の修養の如何に大切なるかを思はねばならぬ、農村は之と消長しつゝあるを思ふべきである。

病床雜觀

額賀生

○病氣の福音

吾々は時々休養を要する。斷えず氣を張り、體を勞するといふことは不可能である。社會は戰場である。此所で最後の勝利を贏ち居やうとするのは、吾々は暫く戰線の外に退いて元氣を養はねばならぬ。之は再び勇ましく善き戰をたゝかはんが爲である。病氣は神が特に吾々に賜ふたる休養のときである之を禍だと思ふのは勿體ない譯である。寧ろ感謝して受くべきものである。病氣の間だけは社會に對して是非とも働かねばならぬ義務はない、誰に遠慮する所もなく氣まゝに床上に横臥して居つてよい。又さまざまなる世の事を思ひ煩ふことも要らぬ。人生眞の休養は山間や海濱に轉地しても必ず得られると限らない、吾々が全く休むときは唯病中だけである。斯樣に考へてみると病氣必しも厭ふべきものでない、又悲しむべきものでない、反て神の恩寵として感謝すべきである。加之、吾々クリスチャンは災

を轉じて幸ひとなし、悲みを化して喜となすの覺悟がなくてはならぬ。

○無頓着が肝要

哲人エピクテートは『病氣は身體の故障であつて心の故障ではない』と道破して居るが、斯の如く悟つて了へば病氣は左程苦しいものではない。身體に有らゆる痛はあらう、併し心は平常と少しも變らぬ狀態にあるのである。ところが世間普通の病人はさういふ譯に行かぬ、大抵は身體の煩らひのほかに猶精神の煩らひが伴うて居るものである。チヨツト風邪をひいても直に肺病ではないかと心配したり、少しの腹痛にも生命に拘はる大病と思つたり、己れが死んでから後の妻や子の行末、親や兄弟の悲嘆など夫からそれと妄想を起して、非常に精神不安の狀態に陷るのである。これは謂はゆるヒポコンデリーで、一たび此ヒポコンデリーに襲はれるといふと、實際の病氣の苦しみよりも、其方が幾層倍も苦しくなつてくる。而してさうなると病氣は最早單純でなくて、益々複雜になる殊にはいろ／＼の病氣のことなど少し知つて居るものが反つて此ヒポコンデリーに陷るところをみれば、病氣に罹つたならある定度までは無頓着になることが肝要である。無頓着といふと何となく變に聞えるが、神の御手にうち任かせるといつたら宜からう。さりとて醫者も看護人も要らぬといふのではない、神の力は又かういふ人々を通して顯れる。神の力は天地に充滿して居る。此力に賴るほど心安いことはない。病氣が重態に陷つたときには、呼吸が促迫して益々困難になる、心臟の働が漸々衰へて來て、體力は次第に消えて行く。斯んなときに踠いてはたまらない、踠けばもがくほど深みへ落ち込んでしまう。好んで自殺するやうなものである。されば成るべく靜かに氣を落付けて、體も心も否苦痛も何もかも神にうち任かせなければならぬ。さうすれば大いに安樂になつて、一旦消耗した活力が再び歸つてくる。そして恢復も亦非常に早いのであ

る。

基督が病者を癒やしたもふたときに『爾の信仰爾を癒せり』と仰せられたが、實にこの中に無量の意味がある。

○聖靈の祈

祈禱は基督者の生命である。吾々の生涯は祈禱の生涯でなければならぬ。而して祈禱の力が如何に偉大なるものであるかを實驗することが吾々の信仰生活に於て甚だ大切である。祈禱は病氣を癒やす功德があるかどうか、議論は且らく措いて、唯祈ればよい。祈りさへすれば分かる。兎に角吾々が病氣のときに自ら祈り得るといふことが既に大なる力である。之が命の綱である。祈られるだけ祈らねばならぬ。されど最早全く疲れ果てゝ祈ることが出來なくつたときには、誰か自分の爲めに祈つてくれるものがあるであらう。眞に熱誠をこめて祈るものはたゞに自分の妻ばかりではない、涙を流して祈るものは父母あり兄弟あり、又我儕と信仰を共にする幾多の人々あり。之れは大いなる力ではないか。吾々の衰へたる精神は之に由つて興奮してくる。されど人は大事の場合に至つて失望する、而して祈る元氣さへも遂に失ふてしまつて、唯泣き悲しむばかりである。自分も祈るだけの力がなく、人も祈つてくれることが出來なくなつても吾々は猶ほ賴るべきものがある。それは『聖靈も亦我儕の荏弱を助く、我儕は祈るべき所を知らざるも聖靈みづから言がたきの慨歎を以て我儕の爲に祈ぬ』といふポーロの言である。聖靈の祈―あゝ這の中には靈妙不可思議なる偉力が籠つて居る。又無限の慰籍がある。これが吾々を絶體絶命の場合から救ひ得る唯一のもではあるまいか。

○死の影は明るい

「靈魂不滅」とか「來世の有無」とかいふ問題は「死」からずつと離れた所で論ずべきものである。醫者にも見放され、死が目前に迫つた病人にはさういふ議論

などする遑はない。

死といへば何だか恐ろしい黒い影のやうに、或は今迄よく、ともつてゐた燈火が忽ち吹き來る風に消されて真闇になつた後のやうに思はれた。而して死は卽ち止で、人生の行止りだと考へた。ところがそれは全く誤つた考であつたことを今悟ることが出來た。成程遠方から眺めると死の影は黒く見ゆるけれども、近か寄つてよく見ると思つたよりもずつと明るい。又死は止ではなくて其先に大いなる活動がある。吾々が今の世に生れたる前にはこれよりもヽつと暗い世界に居つたらしい、吾々の意識とてもヽつと朦朧として居つたらしい。それが漸々夜の明けるやうに周圍の世界が明るくなり、また丁度目が覺めるやうに意識が明確になつて來たのである。斯のごとく次第に發展して來た吾々の人格が死の一字を以て容易く取消されて了うとはどうしても信ずることが出來ぬ。死は萬事の終りではない、死の一歩先には新たなる生がある。吾々の身體は病勢が加はヽるに從つて衰へる、肉は落ち、骨は枯れて實にはかない狀態になる。しかしながら其時吾々の意識は不思議にも恰かも外部の壓迫が除かれて自由になつたかの如くに益々擴がつて行く心地がする。其時は是迄知ることの出來なかつた世界の消息が伺はれる。ポーロの謂はゆる肉の體は亡びても、靈の體が生き殘つて更らに新たなる活動を開始する。最早時間や空間の制限を受けずして寧ろ之を超越して了つて居る吾々の靈的人格は謂はゆる死てふものに由て、其肉的殼皮を脫して是より新しき條件の下に猶存在を繼けて行かうとして居る。それが謂はゆる「永生」か、それが卽ち「天國」か、強いて名けやうとすれば既に第二義に墜ちる。這般の境涯は吾々の言を以て何とも名の付けやもないけれども、死の床の苦しみの裡にあつて猶ほ歡喜に心躍るのが不思議である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

避暑地より

避暑日誌

海老名みや

(一)準備―お父様は御隱居様ですね

十九日(水)

お母様逗子にはいつ行きます、廿日から學校はお休みになりますよ、其日にすぐ行きましやうとせがまれて考へて見れば、もうけふは十九日。あれやこれやの用におはれて逗子行の仕度に取かゝる氣にもなれませぬが、いつ迄と切りを付く可き時もなさささうですから大奮發で廿一日と極めましやうか。廿一日の朝といへば明日一日しかありませぬ。新女界の原稿も後れ〳〵てやつと大塚さんへ送つたばかり。鮮人歡迎の下相談やら何やかや、あの方やこの方にお話ししなければならぬこともあり、それに如何に簡易生活の假住居とは云へ、四十日の間、八人の大家族が寢たり起たり食べたりする丈の用意はしなければならないのですもの、一寸これも一仕事です。明日一日に仕舞されるか覺束ないもの。主人の方はと居間に行て見ますと、今し訪問のお客をお送して參考書類や、原稿の書きかけや、コーヒー茶碗や、

お菓子鉢などゴチャ〳〵の机に向つて、餘念なく讀書して居られます。如何しましやう、愈々明後日に致しましやうかと尋ねますと「あゝ行くさ〳〵」とあまり無雜作の答に、二の句もつげず、愈々行くと決心を致しました。して見ると今更の樣に、あれもこれもと樣々のことが浮んで來ます。何んでも「行さ〳〵」と氣をはげまして電話をかけたり、手紙を出したり大忙しです。子供たちは大勇みで各々の荷物ごしらへに餘念なく何時になく家中ひつそりして居ます。

廿日(木)

今日は豫定通り晝前に外出の用事を終つて片付にかゝりました。勝手廻りの方は一枝やかつの手で、衣類夜具等はノル.シーの手で、あれこれを持よせてありましたものを見分けて、指圖して四つ五つの行李や大包とし細かいものはそれ〳〵手さげや籠につめて大略眼鼻をつけたのは五時頃でした。殘つた仕事は書齋や書き物の道具一式で、これ丈はお父樣のお仕事として置きましたが朝から入代り立代りの來客も一寸とだえ、書物も濟んだと見へて讀書の聲がきこえますので、あの荷物はどう致しましやうと申ますと「よし〳〵今におれがする」。今にと仰つしやつてもう五時過ぎます。暮れぬ前には皆濟さねばならぬ。こちらではこんなに氣ちがひの樣になつてやつてるのに御自分ばかり知らん顏でと少々腹の虫が動き初めましたから其勢でさつさつと二階へ上つて三十分ばかりですつかりつめて仕まひました。下へ降りて見ますと、行李を初め數個の荷物は奇麗に極り能く若月さんの手でしばられて整然とならべてありました。そこへ座敷からのそ〳〵とお出かけになつたお父樣は「あゝもう荷物は出來たねえ」とお擧めのお言葉、これをきくと一枝はすかさず「お父樣は御隱居樣ですねへ」さこれには大閉口、御隱居樣とはあんまりひどいと皆々大笑ひで、先づ荷物の片付は大抵濟んでしまひました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

(二)到着—綱のすき様許りは
主人に教はりました

廿一日(金)
豫定通午前八時の汽車の同勢八人出發。お父様は鎌倉で開催中の夏期學校に於て、午前十時から講演の筈になつて居りますが、御隠居様といはれたのが口惜しいから今日は親仁の役を務めてやると、態々逗子迄行て、荷物の世話をして、次の列車で鎌倉へ行かれました。出向ひの久子さんや直子さんや盛ちやんと皆子供たちはずん／＼櫻山へ向ひました。例によつて彼の山上の一軒屋。今年は疊も新らしく、唐

紙も貼り替へられ、奇麗に掃き消めて、開け放つた部屋から部屋を吹き通す風の心地よさ。お孝さんのお手紙ではないが、小包にして都の友にお送りするわけには行かず、せめては此處へ來た私共が今おはやりの腹式呼吸でもしてよい健康を得て、それをお土産に致しましやう。例によつて德富さんからのお壽司にお腹をこしらへて、荷物の片付にかゝりました一枝とかつと三人でせつ／＼とやりましたので三時過ぎには大略整ひました。德富の御祖父樣御祖母樣共に無事、一昨年と替らぬ御健康は心强く思はれます。

廿二日(土)

此日は早朝から主人と二人で網の修繕、午後三時頃には見事に出來上りました。網漁は避暑中主人の唯一の運動であります。ジャボンと網を廣げた瞬間は世の中のことも何もかも忘れはてゝ、身は十五六歳の柳川時代に歸るのだと申されますので、何はさて置き網にとりかゝるのであります。よく私に御飯のたき樣はおれが敎へたと申されますが、敎へられなくとも御飯位はたけた樣に思ひますが、網のすき樣ばかりは主人に敎はりましたに相違ありませぬ。今はもう中々熟練なもので自分ながら漁師の妻たるに恥ないと思つて居ります。初漁にいなの子五十疋二度目に三四寸の鮒百五十疋許りとれました。雀燒にしたり、何かにして皆んなでおいしくたべました彈夫と雄二はお漁のお伴が大好きで何時もバケツさげてお父樣と一所に參ります。一枝はお魚をお料理するのが好きでかつも樂んで致しますので大仕合です。

廿三日(日)

主人は六時の汽車で東京へ行かれました。あとでお樂りをして樂しい一日を過しました。

(三)病氣―書くに堪へぬ苦しき二週間

廿四日より八月十日迄。

あゝ此十餘日の日誌は書くに堪へませぬ、只其大要を記しましやう。

朝起きますと、あや子が何んだかお腹の氣持が惡いと申ましたが、食事も平常の通り致しましたのでさまでとも思はず、お極りの通り德富さんの所のお聖書の講義に參りました。歸つて見ますと、何んだか氣持が惡いといつて、座敷にゴロリと横になつてをりました。見れば大分熱もある樣で其中數回の下痢に腹痛も加はり、熱は益々昇りまして十時頃には卅九度以上になりました。何んだか心配ですから兎も角もと土地の醫師に來診を乞ひました處、大腸カタールとのこと、嚴重に便の消毒を命せられました乃ち大腸カタールは倘一歩以上を意味することは明白であります。あゝ私は實に、と胸をつきました。旅先でこの病氣、他に大勢の子供もあり、一方傳染を防ぎ、一方病兒の看護、只身を以て當り天父の愛護を蒙るのみと決心して、數日の間、晝夜殆ど一睡もせず嚴密な注意を以て看護致しました。他の子供も此恐ろしい病人と同じ蚊帳に寢るのですから、萬々一手落があつて、傳染してはとそれは〳〵心配であります。それよりも病兒の苦痛を見るの辛さ切なさ、親としては堪へ難いことであります。が、親なればこそ此苦痛を十二分に感得して、そして堪へることが出來るのだと思ひます。かの嵐の夜半の如き、外は烈しき雨と風に暴れ狂ふ波の音さへ加つて凄じさ云はん方なく、内は病と戰ひ其苦を忍ぶうなりの聲病兒の父と母とはの兩側につき添て夜もすがら神に祈りつゝ看護しました。外の嵐はやんでも兒の病はおこたりませぬ。此看護の中に一しほいぢらしくも亦嬉しく思ひましたのは十歳の幼兒として其病人振の如何にもよかつたことであります、どんないやなお藥でも、苦しい洗滌でもいやだと一言も駄々を申ませぬ。「まあこんなに苦るしいことは初めて。母樣、死んだら嘸いゝでしやうねへ。それでもこんなに丈夫な體を神樣が下すつたんだから、死ではいけないでしやうねへ』などゝいはれますと聞く親は實

に辛ふございます。食物でもお醫者樣のお許しがなければどんな食べ度いものでも欲しいとも申しませぬ。少しも無理な手數や苦勞をかけてくれなかつたことは病兒も幸ひ親も仕合でした。八日目頃から快方にむかひまして、苦痛も大に薄らぎましたので、病兒も私共もホット息を致しました。が、床を拂ふに至りますには十五日程かゝりました。一同の後返りもなくめき〳〵力付て參りますのは、實に感謝に堪へませぬ。主人も二日からいつになく痔疾の爲に十日程臥床致されまして樂しみの網漁も出來ませんでした。こんな工合で避暑の半以上を苦しく過ごしました。此間たへず磯の香を含んだこゝ地よい風は部屋から部屋を吹き流して力を添へてくれました。又德富家の御心添は如何許りの助けでありましたらう。醫師も誠に心切にして下さいました、から折柄眞に嬉しいのは人の眞心であります。

(四)感謝—文藝會とめづらしき客來

十一日(金)

今日は久子孃を會長とし、みち子副會長の役を務めて德富、湯淺、海老名三家の子供の文藝會を德富さんで開きました。十四歲を頭らに七歲迄、八人の子供の唱歌、朗讀、おはなし、文章とり〳〵に、いづれも上出來でありました。これは何もかも子供等の頭より作り出されたものでありまして、其プログラムの意匠の如きは私共では及びもつかぬ程ハイカラに出來て居ました。番外として八十三歲の德富老母の三味線と私の琴で雪の合奏を致しましたのは實に醉つてをりました。あや子も此日初めて德富さんまで參りまして會に列することが出來ましたのは實に嬉しうございました。

十五日(火)

今日は思ひがけなく元良夫人が御子息をおつれになつて鎌倉からおいで下さいました。處へ東京から大塚樣も入らつしやいまして眞に嬉しうございました。主人も殆ど全快致しまして、久しく止めてをり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ました網をしよつて大塚さんと雨を突て出かけましたが、二三十疋のいなや、鯔や、はせを取つて歸られましたので六七寸のいなの鹽燒を大塚さんの御膳にのぼせたのはせめても御馳走であつたと思ひます

十七日(水)

あや子も今日から和らかい御飯を許されました。主人も愈々全快、今子供をつれて網をかついで出かけられました。私は今朝から新女界の原稿にいぢめられて居ります、これが濟んだら濱へ行つて思ふさま海氣を呼吸して元氣を養ひませやう。神樣は殘る十餘日を以てこれまでの損失を償つて餘りあらしめ給ふを信じます。いゝえその損失と思ふことも悉く私どもの益であることを信じて感謝の外はありませぬ。

呑氣な生活

元良よね

△據なき次第と御察し下さりませ

此所は神奈川縣三浦郡田越村字飯島と申て新橋から汽車に乘て鎌倉で下り、廿五錢奮發すれば俥がお供、歩いても三十分餘りもかゝれば樂に來られる所でございます。名からして何だかお百姓じみてゐますが、其實百姓家は山の上にたつた一軒で、あとは米屋、煮賣屋、ところてん屋、大工に漁夫の家が數戸、外にお寺が一、別莊が四五軒、これが飯島全體なので、至て質朴な閑靜な其の代り、少々汚い小部落でございます私の宅では今夏は主人は都合によりまだ參りません、娘も父の相手に宅に殘り、私は宅には用事も山程あるに、それをも打すてゝ當年十八歲になる次男と、十二歲の三男とを付れて七月廿一日此所に來ました、如何にも氣樂さうではありますがこれも子供の守として據ろなき次第とお察し下さい

ませ。

△箱根から伊豆の山々

この家は甚だ古くて小さくて見すぼらしうございますが、外の眺望と申たなら王侯貴人のお庭も及ぶまいと思ふ程、何しろ廣い〳〵相州灣をわが庭の池とも見られるのですもの、右方には稲村ケ崎と相對して江の島が浮き出てゐるところはまるで繪の樣、それで西の空が晴れてゐる日には其間に富士の峰が高く聳え、ある時は白く、ある時は黒く又ある時は雲の間から美い姿をあらはし、又一天晴れわたつて雲の無い時は、箱根から伊豆の山々、さては大島までほんのりと雲の樣に見え、さうしてこんなに美く取り圍まれた灣の中は、風のない時は鏡のやうに平かで、その蒼々として水の面には無數の漁船があちこちに散らばつてゐて、つい眼下の大岩には、ぼんやり〳〵としづかな波がうち寄せ、何ともいへぬ風情であります。又少しく風だつ日には沖の方から土手を築いたやうな浪が寄せて來るよと見る間に、岩

に碎けて眞白な飛沫を高くあげるその勇しさ、實に氣持がようございます。さうかと思へば一夜のうちに海の面は一變し、水は土色にさか巻き怒濤はがう〳〵とすさまじくもまた壯嚴な樣を呈することも珍しくはありません。

△朝、晝、晩

朝な夕なこんな景色を眺めながら、至つて呑氣に暮して居ります。朝は早いと申ても起きるのはまづ五時頃、髪をとかしてから外に出て、車井戸の冷い〳〵水で面を洗ひますと、其氣持のよいこと何ともいへません。それからお米を洗ひお炊事にかゝりますと、頓て表の方で「お早うございます」。これは降雨ても照ても必ず毎朝來る魚賣の爺で、隣村の小坪から鎌倉の方へ賣りに行く途中、第一番にこゝに寄るとの事で、お魚は何でもお好み次第澤山持てをります。鱸、黒鯛、めばる、かさごの類は大抵生きてをります。次に來るのは牛乳屋、そろ〳〵子供が起きて、弟が座敷を掃く、その後から兄が雜巾がけを

する。頓て御飯が出來て、三人卓を圍んで食事をする。それから子供は學科の復習をし、それが濟むと海に入る私は御飯の後片づけやお魚のお料理や、お天氣がよければ洗濯の一二枚もして、うちに上り、例の海をながめながらはつと息をつく。間もなく外の方から、「唯今ッ」と大小二個の眞黑な姿が現れる。はや時計は十一時近くを示してゐる。まあ新聞でも見る、若し此時「郵便」とでもいへばそれ

こそ天使の聲、懐しい方から來狀でもあるか又は東京から雜誌でも廻して來ればいよ〳〵以て喜悅滿々の次第であります。午後は子供は一回海に入り其前後は隨意に雜誌でも讀んだり遊んだりしてをります。私は手紙を書いたり、縫物をしたりします。あまり暑くない日には三人つれだつて散歩に出かける事もあります。夕飯後弟の方が一寸英語の稽古をしますが、しばらく涼んで早く床に入ります。

何と申しても男の兒二人が相手ですから、呑氣は呑氣ですけれども、殺風景極まつた生活振りで以前の樣に老人や主人や子供も男女うちつれて來ました時分と比べますと誠に寂しく又物足りないやうな感じがいたします。

△あんまりな案内者

この間暴風の翌日東京へ電報を出さうと思ひまして、停車場前の郵便局へ參りますと、電信不通後刻開通はするが、澤山つかへてゐるから明朝にまはる事によれば郵便の方が速く達くといふ事でしたから葉書を一枚求めて三人とも無事な事を自宅へ報じ、直ちに引きかへさうと思ひますと、同伴してゐた三男が此所まで來たから、序に大塔の宮の土牢を拜觀したいとせがみますので、日中の暑い盛りをとぼとぼ歩いてとう／＼鎌倉宮に參りました。まづお鳥居をくゞつて、お堂の前に出で後の方にまはりますと既に一人の先着者が案内者に導かれて、段を登る處でしたから、幸ひ一緒に案内を賴みました。案内者は

頻りと牢の構造を說明し頓て宮樣は此處にお隱れになつてゐらつしやいましたが、つひに御自害に及びました」と申しますから、はてこの案内者變な事をいふなと思つてゐますと、後で今日は案内する人が留守ですから私が代りに御案内しましたと申しましたので私も道理こそとは思ひましたが、それにしてもあんまりでは御座いませんか。歸途子供に向ひ、「今の人は妙な事をいつたねえ」といひますと子供は「でも土牢が見られたからうれしかつた、土牢の由來はあの人からおそはらないでも、學校で先生から伺つて知つてゐるからいゝ」と間違でゐたとおかしかつたとも何とも言はず、一向意に介せぬ樣子が尙更おかしうございました。

△都戀しくなりました

こんな風な簡單な氣樂の生活もたまには氣保養になりますが、長くは飽きます。殊に朝夕冷氣を感ずる頃となりますと、何となく都が戀しく歸りたくなります。最早暑中休暇も殘り少くなりました、東京

に歸りましたら、思ひ入り働かねばなりません。秋は何となく物しづかで氣もおちつき氣候も暑くもなく寒くもなく年中の最も働きよい時ですから、學問する方も勞働する人も同じく精を出して充分の取りいれをしたいものと思つて居ります。

赤城紀行

九里原生

△灰神樂は松葉の雪

七月七日午前六時に故山澁川の八幡前なる伯父の家を立つて一人赤城登山を試む。八崎の渡船にて利根の流れを横ぎり、曲折多き山里の坂路を上ること二里にして持柏木村字冲石に至る。赤城は最高峰たる黒檜山すら僅に六千尺程である。里程は澁川より五里に過ぎぬ。然るに時々登山者にして行衞不明となるものがあり昨春の如き某文學士は寒飢のために落命された。それがために頗る危險の山と稱されて居る。これには大なる理由が存するのである。その詳細は後に讓つて唯一言赤城の危險は風にあらず雨にあらず霧であると云つて置く。この日幸か不幸か冲石に着いた時には八時過ぎであつたが、山は一面の霧の衣に裹まれて仕舞つた。案内者なくては不安であるから、途邊の農夫に尋ねたが、自分は時々案内者として登るといふので幸に賴むことにした。その農夫は直ぐ傍の家に導いて、これから先には人家は一軒もなし、一滴の水もないから茶を充分に飲むでゆけと云ふ。そこは家と云ふよりは小屋と云ふ方が適當である。一風煽つたら直ぐにも倒れる位傾いて居る上に、數十年前に葺いた藁屋根は雨は勿論月も射し込めば、雪も降り積るほど空が覗いてゐる。傾いた壁に二尺四方ばかり穴を剜明けて光線を導き其處で糸を取つてゐた妻君が、大きな鐵瓶の懸つて居る臺所居爐裡にやつて來て、山ほど積むである枯松葉を折りくべた。手次早に投げ込む松葉に忽ちに白雪となつて爐邊に居る僕等の頭上に降つて來る、

盆の上は勿論茶碗の中へも少なからず落ち込む。妻君は急須の中の茶殻に湯を注いで、二三度揺振つたと思ふと火の燃えて居る爐端へ打ちまけた。灰神樂は松葉の雪と手ぐらむで空中の大舞踊を初める。斯くて先づ茶の馳走になつて出かけた。

　これから小松原が一里半續くのである。案内者は齊藤勝五郎と云ふ人でリーダーにあるロビンソークルーソーにソックリ、髭の中から目と鼻が出て居るのである。今年取つて四十歳、十二を頭に三人の子持、初茸をドレ丈け持つてゆけば東京見物が出來るかと云ふ見當がつかない質問をする。自分の名さへ認められなくて用が辨ずるほど原始的な生活をして居る。霧に包まれた小松原の中の草路を踏み分けてゆくので腰から下は露でスッカリ濡ふ。案内者が初茸を取つて見せる、色々な草花の名を敎へる、深山鶯が實に美しい聲で谷渡りを轉がして居る。この山で珍らしいのは大輪の菖蒲が草原に水際立つて咲き誇つて居ることである。案内者は野苺を啄みながら縦いて來る。兎角する中に松原を出で山の趾にかゝり、「鷹繋」と云ふ處を經て少時く登り、巖石の上に横はつて戸渡の谷を見渡した。野も山も里も川も一色の霧の海となつて融けて仕舞つた。巖上で握飯を頬張つて居ると、傍の案内者が「鈴ヶ嶽」が出たと云ふ。振り返つて東を仰ぐと烏帽子形の紫紺の鈴ヶ嶽が半身を現はして居る。霧の帳りが眼下の谷の底からスーッと引き上げられて、刻々に現はれて來る谷底から山腹、山腹から山巓の光景は先きの世で見た樣な氣もすれば、夢に見た天國の光景が活現した樣にも思はれる。サラバと云つて説明する程のものは何にもない。唯緑りで敷き詰めた谷底に樣々の形態をした小さな岩が何とも云へぬ配置されてゐるその間に紫の菖蒲が夢の樣にポーッと佇むで居る。下界は更に見へぬが、天界には鮮に地藏ヶ嶽、荒山、鍋割の連峰が聳えてゐる。その山とこの谷の中間にある巖上に白い蝴蝶が止まつた樣にして山氣を吸ひ込むで居ると、見る〳〵左手の谷は霧の海となり、

幽に霧中より螽斯の鳴く音がきこえる。霧の活動は息む時なく忽にして右谷を覆ひ復た忽ちにして左谷を現はす。この戸渡りの霧景色は完全なる人格の如く際立つて何處と指す處はなくとも、全體が壓しつける樣に聖い美しい感じを與へて、この世のものとは思はれなかつた。

湖畔詩人が旅人を蝶に譬へて居るが、白衣の蝶々の樣にヒラ／＼と山坂を登つて行くと「六道の筋」から名にし負ふ赤城新坂の牧場にかゝる。山上は霧が晴れたのでモウ危險もなからうと路を敎はり案內者を劬つて歸し、姥子崩の崖をめがけて登ると半時許りで頂に達した。時は恰も正午であつた。霧が籠一面を蔽ふて山顚の眺望は何もない、唯雲上の人となつて鈴ケ嶽に啼く郭公の聲を聽き乍ら頂きを下り折柄催せる雨の中を幾度か路を迷つて黑檜山下の赤城湖畔大洞の猪谷旅館に着いたのは一時半であつた。

△落日の運命を嘆つ青年文士

赤城湖は黑檜、駒ケ嶽を東岸に聳えさせ、西南岸に雜木の林を遶らせ、此畔に小高い牧場の青草原を波打たせた周回里餘の小湖である。黑檜山麓の苔蒸した雜木の林中に建てる赤城神社は神閑て居ると云ふ丈のこと、榛名湖の樣な明麗な山光水色はコヽには見られない。けれども榛名にない尊い特色がこの湖にある。幽暗の空氣に包まれた凄い黑い樣な湖水、震へる樣な冷々たる風、この靜かな落着いた周圍に默々として牧牛がノッソリ／＼歩いて居る。幽懷の情は、此處に起つて榛名には起らない。深く人生を懷ふものには此處に生命の故鄕を見出すであらう。

沼尻に一軒、それと相對した（見へはしないが）東の湖畔に一軒、宿屋とも茶屋ともこの二軒きりである。我が猪谷の屋に靑年文士が夫婦で滯在してゐたので、共に信仰問題を語つて一夕を過した。彼は禁斷の木の實を大膽に食うて恐怖と懷疑に襲はれた結果、精魂が盡きて落日の運命を悲しむで居るが、幽

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

懐な山中の湖畔に今年を送つて此處の自然に同化し得れば復活の望は充分に得られやう。黒松の嶺に懸つた十二日の月は狹霧の中に薄明の光を放つて居る

香ばしき若草に悠々自適の牛馬

曉に起きて朝風にヒタ／＼と波打ち寄せる湖畔に佇めば、早起きの牧牛牧馬は汀から山の畝まで悠々と散策をやつてゐる。早速朝飯を濟ませて西岸に沿うて元來た道を引き歸し新坂の牧場から再び山顛に登つた。此處が赤城を大觀するに尤も好適地である此處に來て赤城の牧場の大なることと、その特色とが分る。此處の牧場は鈴ケ岳、地藏ケ岳、荒山、鍋割、黒檜山と云ふ六千尺内外の五つの高山と無數の小山を圍むだ周圍約八里の大牧場で、この中に大小三ッの湖水がある。その大きな青草の野をグル／＼と土手を築き、或は溝を掘つて圍ひを拵へ、其所此處に牛馬を出し入れする門が立て丶ある。山の畝や麓の木蔭や沼尻の川の邊りや、湖畔の此處彼處に褐斑、白、黒、樣々の皮膚を有つた親牛、子牛、親馬、子馬が幾百か幾千か知れないが、寢たり起たり佇むだりブラ／＼歩いたりして悠々自適の生活をしてゐる。氣は淸く水は冷かに、綠の野は香ばしき若草に蔽はれて居る。詩の二十三篇に「エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ、エホバは我を綠の野にふさせ、いこひの水濱に伴ひたまふ。エホバは我が靈魂をいかし名のゆゑをもて我をたゞしき路に導き給ふ」云々とあるが、此處に來つて初めてこの語の實景に接した思ひがする。この廣い／＼牧場に綱の袋を背負つた極めて少數の牧者が居る（その日は二三人しか見へなかつた）そして此處の牛馬は乳を搾られるのでもなければ大きくなれば遠國へ賣られるのでもない（多少はあるか知れないが）この山の近村近郷に春の養蠶が初まると牛馬の背をかりる用事が少なくなる、それと同時に秋の手數を除き且つ自然の放飼で英氣を養はせるために、秋が來るまで皆この牧場に預けるのである。故に氣儘に野放に自然

に生活して居る、この牧場の牛馬は皆一人々々に心を懸けて居る持主があるのである。それを預つて居る少數の牧者はかくも多くの牛馬を一々記臆してゐて、あの畝にゐるのは隣村の新屋敷のだとか、あの木の下に寢てゐるのは何村の誰さんのだとか、チャンと覺えてゐて危險のない樣に注意して居るのである。そして秋が來て所謂天高く馬肥へたる時に持主が自分の家に伴れ歸るのである。基督が「我は善き牧羊者にして汝等は我が羊である」と譬へられた個人々々に對する豊かなる天父の恩惠と牧者の愛を今更の如く適切に感ぜざるを得ない。吾輩の暑中休暇も終りに近づいた。赤城の牧場に避暑してゐた牛馬諸君も秋風と共に己が働きの持場に歸りゆくことであらう。

△赤城山の危險

赤城の山巓から西空を仰げば榛名山脈を前座として遠く甲信飛越に亘る日本アルプスの雪を戴いた連峰が見える。眼下には五里を隔てて坂東太郎が利根の山間から流れ出でゝ緩々赤城の麓を迹り銀帶の如く關東の平野を南に貫ひて居る。昨日通つて來た「鷹巣」「戸渡」は脚下に波打つて居る。この廣濶たる草野には縱橫無盡に小徑がある。この小徑は多くの牛馬が縱に踏みならしたものと、それに交つて草苅徑が幾筋となくある。赤城の危險は路ならざる徑が多い處にある。案內者なしに一度この境に脚を踏み入れた時卒然として白霧の覆ふ處となるや咫尺も辨じ難く徒にこの迷宮を彷徨する中に飢渴と寒凍の虜となつて落命の慘事を惹き起すのである。

飽かぬ別れを山巓に告げて前橋まで六里の路を下り初めた。少時にして地獄谷に出る。硫黃の溶解せる紫色の谿谷なれば、この名を附けたのであらうが名ほど怖ろしき處ではない。この谷に地藏の湯がある、これも名ほどに床しきものではない。白川に沿うて三里下り、二里の松原に路草食うて、前橋教會のN夫人の土産にと思ひ、初茸を見附けては小笹

に刺して吊して來たが、掌と白地の浴衣とが茸の汁でベト／＼になるので惜しかつたか、松原に投げ込むだ。

△前橋教會

チリ／＼照りつける八日の午後二時半前橋教會へ着いた。N先生は折りよく在宅、奥樣も女中も留守なので先生御自身が井戸から桔槹で水を汲むで下さる。それから體を拭つて堀牧師時代からお馴染の客間にゆくと、床に

いしかねも透れかしとてひと筋に
射る矢にこむる大丈夫の意地

と云ふ新島先生の立派な幅が掛つて居る。七八年この方の我儘が不相變先生の前で演じられるその中に奥樣がお歸りになり、何でも宿れと止めて下さる。それから澁川の伯父の家へ電報を折つてユツクリ腰を据へ、樂しい晩餐を頂いてから椽先に射し込む十四日の月を浴びながら談は進むでシンミリト佳境に入つてゆく。庭先の川は涼しい音を立てゝ流れてゆく。N夫人の有名な都戀の談が出た。この山戀は時々反對して見たが、N夫人の都戀は實在に聯なつた根底がある。終には同情同感になつた。然しそれはこの世の都ではないと思ふ。山戀ふるも都を戀ふるも何れは同じ靈魂の故里を戀ふて居るのではあるまいか。聞くならく神の都には靜かに流るゝ淨き河ありてすべて渇ける御民の心をば霑ほすと、吾等の都も山も此處永遠に存するのである。夜が更けた。

翌九日は聖日、久しぶりでN先生の「信仰生活の晩年」と云ふ力ある說敎を拜聽した會衆は白名程で中々盛んである。

午後は再び懇談を初めて夕に至つた。一晝夜の中寢た間と禮拜の時間を除くと後は殆ど話し詰めであつた。それでも話は盡きなかつた。

歌人のお庭は流石に草花が多い。紫陽花、夏水仙、薔薇、香仙、紫苑、孔雀草、コスモス、鷄頭、桔梗

月見草、その外柳、櫻、桃、巴杏、無花果、迚も數へきれない。

オツト道ちやんの大きく大人しくなつた事を忘れてはならない。

可愛らしいお手紙

一記者

去月十五日記者は御病氣御見舞かたく〳〵、逗子に海老名先生を御訪れ致し、午前から夜までの一日を樂しく遊んでまゐりました。折あしく曇天で、雨さへ時々降つて來ましたので、富士の麗姿を見る事が出來ませんでした、けれど山腹の木立深い御椽先きに座つて眺めますと、逗子の灣は一目に入りて、松吹く風、寄せて返す白波に、今朝迄都の塵にまみれてゐた身の、どうやら夢の樣にも思はれるのでした。雨ふれば海も山も一色に包む霧の姿、晴間に漏るゝ日の光、虹の色、誠に氣象萬千の趣きで御座いました。たま〳〵山越をなして鎌倉の方から御出になつた元良御夫人にはからずも御面會致し、暫らくは淸談に耽りました。午後は先生に御供をして彈夫さんと雄ちやんがバケツ持ち、私も小さな方の投網を肩にして川に出かけ、初めての網打をなして寸大の魚五六尾をさつたなど私には忘れられぬ興味で御座いますが、海老名御夫人の日誌にいと面白う書いて御座いますから、私から申しあぐる必要もありますまい。うれしかつたは、超えて二日、逗子から可愛らしい手紙がまゐりました。彈夫さんと雄ちやんのには裏に靑や赤の鉛筆で富士山や海や松やの立派な繪が書いてありましたが、之を御目にかける事が出來ぬは殘念であります。(一記者)

○

一昨日は御天氣がわるくてこまりましたね、昨日はすさまじい波と風の音がきこゆるばかりで、ものすごい有樣で御座いました。それで今日大塚さんがおいでにならないでよかつたと云つてをりました所夕方になると風はだん〳〵おさまつてきました。そして夕食の時西の空を見ると、富士が五色の雲につゝまれてあらはれまして、見る〳〵うちに色が樣々にかはりその美しさはなんにたとへやうもありませんでした。其時みんながこの富士を大塚さんにおめにかけたいところを揃へて申しました、こんど又おのうちにおさまつてよいお天氣になりました。昨日の嵐も一夜天氣のよい日においであそばせね、のうちにおさまつてよいお天氣になりました。今ひるごはんをしまつて、此の手紙を書きました。これから海水浴にまゐります。彈夫と雄二は今、お父樣お漁にゆきませうとおねだりしてをります。さよなら。

みち子。

○

一昨日はおてんきがわるくてこまりましたね、昨日は雨がやみましたけれど、あれてなみのおとばかりきこえてゐてお魚は一ぴきもをりませんでした、けれども夜のごはんの時ふじさんが出て、みているうちに赤くなつたり又うすむらさきになつたりしていゝつくされないほどきれいでしたので、これをあなたにみせてあげたかつたとうはさをいたしましたそれですから又おてんきの時においであそばせね、さよなら、あや子。

○

大つかさん、おとゝひは雨がふつて、ふじがみえませんでしたからざんねんでしたね、きのふはひるのあひだは風がふいてゐましてひるからしづかになりまして、空がきれいにはれて、ふじのあたまがみえだしました。それからゆふごはんをたべてからそれからふじがよくみえましたから、大つかさんにお

めにかけたいとおもひました、あまりきれいですからぼくのゑはへたですけれども、おめにかけますが、さううまくわありません、それからふじがへんです大つかさんまたよいおてんきのひにまたおあそびにいらつしやい。さよなら、まさを。

○

大ツカサン、オトトイハアメガフッテコマリマシタネ。キノフハカゼガフキマシタガ、ユフカタニナルトフジガキレイニミエマシタノデ、ミンナデ大ッカサンニオメニカケタイトモウシマシタ、ユウジ。

黄昏の海

大石秋華

○

南風楡の芽を吹くわが旅のこころに殘るかなしみをふく

○

黄昏をさざ波もなきしづかなる海邊にたちて神をかも泣く

○

きみと來てともにかたりし濱の石ゆふべさびしく浪の碎くる

○

こころよく涙湧きくるゆふべなど紫陽花のはなのかすかに搖るる

○

しめやかに木立くもりてわが愁をぐらき中に啄木鳥の啼く

○

深からぬ闇に息づきほの白くくちなしの花咲きてあるらし

○

わかれきて一人さびしくたどり入る森のゆふ日に蜩のなく

○

有明の海邊の小石ましろきをひろひてあればわきくるおもひ

○

たそかれの海のさびしさ遠ひびく鐘のさびしさ濱鴉飛ぶ

○

久方のそらの青きもえうつさず涙してのみある瞳かな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

家庭

子女教育に對する母の務（其十五）

海老名みや

△奉仕の心

昔は奉仕といへば、君に御奉公するとか、親に仕へるとか申して、兎も角も其意義を不完全ながらもすぐ實際にあてはめて、解したものでありますが、只今は奉仕といふ言葉を一般の人に申ましても、何のことだか、其意味の分る人は恐らくなからうと考へます。君に御奉公としいへば、水火の中も厭はないといふ様な氣になれたものですが、今日はそんなことはむかし語りでたま／＼外國と戰爭でもありますと、義勇公に奉ずるといふ勅語の意味が初めて合點されるといふ様なことでありまして、日常生活の上にこの心が何の位活きて動いて居るかといふことは能く／＼考へて見なければならないことだと思ひます。もと／＼此奉公の心は封建時代に各自其君に仕へて君の祿を食み、一家安穩に世を過すことが出來るは、誠に有難いことだといふ念意から發して來たものでありまして、それを幾代も／＼養成して來たものでありましたから、瓦解とゝもに其祿を離れると同時に其心も失せて仕舞たのは理の當然であると思ひます。王政復古と共に、我こそは一天萬乘の君の臣民であると心得まして、朝に夕に君恩を感じ、君に奉仕するといふ氣持になることは、畏きあたりに御仕へ申す人々や、勤王の精神を養はれた人

々の外、一般人民には六ケしいことであらうと思ひます。我國では此奉仕といふ心は深く養成せられたもの丶樣に考へられてありながら、案外に薄弱で、すこしの變動ですぐ消え失せて仕舞といふものは其源淺く其範圍も狹くて、君に仕へるとか親に仕へるとか、又は師に仕へるとか、只目上に對する時にばかり用ひた言葉で、又然心得たものでありましてつまる處本當の奉仕の意味は合點されて居なかつたのであります。それで現今自我とか個性とかいふことが盛んに吹込れて參りますと、何でも自分の腕次第で多くも少くも食して行かれる世の中、君の爲とか人の爲とかいふのは間違だ、先づ自己一身のことをはかれ、自己の幸福を求めよ、さらば世は何の樣になるものであるといふ風に、自分は地から湧いたか、天から降つたか、あたりかまはぬ孤立の自我を自我と心得ておのがまゝに振舞んとする人々が隨分澤山出來て參りました。それで其身自身が果して幸福になれましやうか。喘ぎ求めてこれを得ず、はては失望落膽、其の行く處を知らずして、自然〳〵に身を過まり、終に奈落の底に沈むものがどれ程あるか知れませぬ。實になさけないことであると思ひます。

△人に役はれんが爲なり

袖振り合ふも多少の緣。人は各々からみからんだ緣の糸に繋がれてるものであります。況んや君となり臣となり、親となり子となり、兄弟となる、深い〳〵緣ではありますまいか。倘押廣めては同じ領土に同じ君主を戴いてる同胞は申に及ばず、四海皆兄弟で、相互に思ひあつて、盡しあふのは自然の人情でありまして、汚れた自我、我儘の自我をとりさりますと、忽ち一天開いて日光が閃く樣にこの心が輝いて參ります。茲に至つて初めて基督が『人の子の來るは人を役ふ爲にあらず、反て人に役はれんが爲なり』とのお言葉の意味が了解せられます。私が申します奉仕の心といふは卽ち此心でありまして、君

に對しては忠義となり親に對しては孝行となり、兄弟に對しては友情となり、他人にも又召使にも、凡ての人に對して自分は盡さなければならない、盡すべき筈であるといふ心であります。此心が我々日本人の中には實に少いではありませぬか。この心を養うことは最も大切なことであると思ひます。と、申てこれが一朝一夕に養はれるものではありませぬ。昔の奉公の心すら失せはてた今日、只々己が利をのみ求めて人情浮薄にのみなり行く今日、理屈で說いて明日から實行せらるゝといふ樣にさう手輕く出來るものではありませぬ。そこで幼年時代に、朝に夕に事に觸れ、場合に應じて此心を起さしむる樣致さねばなりませぬ。又親自身が先づ其お手本を示して一家の主人として主婦として家中のものをおもひやつて『我は人を役ふ爲に來らず、人に役はるゝ爲に來れり』とのお言葉を實行して見せる樣に致すことが大切であると思ひます。

△氣永に敎へると習性となる

よく西洋の讀本などで見ますが、子供たちが惡戲をして遊ぶ代りに寡婦の薪を割つてやつたとか、途中で老人の重い荷物を手傳つて持てやつたとかいふ樣な行爲は、些細のことの樣でありますが、子供にこの奉仕の心を養ふには、誠に力あることだと思ひます。子供の時は二度や三度いひきかせたとてはいるものではありませぬ。幾度も〳〵、たえず申きかせまして氣長に敎へて參りますと、所謂習性となるで、其人一生取さられないものとなるのであります此敎育が家々で能く出來ましたものであつたら、よの中が一變するであらうと思ひます。これを敎へる機會も日々夜々に幾度でもあります。殊に目下に對して何の容赦もなく、我儘をふるまうて、どんな無理でも通すといふ樣なことは、召使でも多く役ふ家にはありがちのことであります。かやうの場合に召使たちが我に仕ふる樣に、我も彼らに仕へて、よく思

ひやつて彼らの爲に盡してやらなければならない。さうすると彼らが喜ぶばかりでなく自分自身がどんなにうれしくて幸であるといふことを與に味ふ事の出來る樣によく子供に敎へてやらなければなりませぬ。何卒我々親自身が基督の御言葉を服膺して深く〳〵其心を子供等に吹込度ものだと思ひます。

家庭改良瑣談

谷津直秀

△私共の日常生活に於て改良すべき點のいくらもある事に氣がつきますが、今さし當つて思ひ出す事は困難であります、然し折角の御出で御座いますから思ひついた事丈を順序もなく申して見ませう。

△日本人は萬事につけ不規則な事が多いのでありますが、之が爲め一番迷惑する事は訪問するに何等の遠慮がない事であります。各自に忙しい職業を持つて居る身ですから、訪ぬる人は先方の都合を考へねば、親切な心からの訪問も却つて迷惑になる事があります。夫故面會日を定めて置きますならば、お互に便利だらふと思ひます。其日は都合して必ず在宅する事にすれば、何時御伺してよろしう御座いまうがなどゝ問ひ合せる必要もなくなり、萬事が簡單にまゐります。然し日本では面會日を定めて置いても他の日に面會に來て平氣で話し込んで中々尻をあげない人があるには驚いて仕舞ます、朝早くとか夜遲く、或は御飯時などに人を訪問すると云ふ事は誠に失禮であります。

△それから言葉ですが、日本では敎育ある人達の中にも言葉といふ事には一向注意されてゐない樣であります。座談でも又は演說でも、下等な言葉を吐き散らして何とも思はない。他人に惡感や、惡い想像を起させる樣な言葉は斷じて避けなければならぬと思ひます。之れが學術に關係した事で其研究會などあらば差支はありませんけれども、一般家庭の間に於ては嚴重に避く可きものと思ひます。

△日本人は一體に表情が足らないと云ふ評がありますが、之は一般の家庭で表情の機會を與へないといふ事にも原因して居るだらふと思ひます。例へば來客があつて子供にお土產を持つて來てくれたと致します。貰つた方では御禮と共に其品物を床の間か何かに上げて仕舞つて、其品が何であるやら知らふとも知ないと云ふのが一般家庭のやり方なやうですが然し此時其お土產を、客の意の通りに、子供に知らせて、其場で子供が喜ぶ樣を客に見せるといふのが本當の意味での御禮だと思ひます。然うすれば子供も自然憘れしいと思ふ情を表す事に馴れるだらふと思ひます。

△それから持つていつた贈物を出す場合に、來た初めに出さずに、歸るとき、「つまらぬ物ですが」と云つて隅の方に押しやつて、そこ〳〵に歸る人がありますが、其贈物の如何に係らず、多少の心が贈物には加つて居る事で御座いますから、相當な禮儀を以て取り扱ふべきだと思ひます。

△吉凶などを見舞にまゐりまして、大概は取り込んでゐるものでありますから、玄關先で其意を述べたいと思ひます時、女中か書生が出て來て其意を受ける程不愉快を與ふる事はありません。御祝ひなり御悔みなりは其家族の人又は其緣者などに傳へてこそ初めて此方の意も受けとらるゝのでありますが、何もに關係のない人に向つてお目出度とかお愁傷樣とか云ふのは實に馬鹿氣た事です。そんな事なら車夫に名刺を持たせてやつても同じ事です。夫れ故私は斯る場合には家族の者か又は其緣者が出て來て挨拶すべきが相當の禮式であらふと思ひます。

△主人と座談を致して居ります室に見知らぬ人が居る時には、主人は其人を客に紹介すべきだと思ひます、紹介されぬと妻君だか女中だか一向解らず御辭義の仕樣もないと云ふ一種きまりの惡い滑稽の感が起るものであります。（談）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

家庭に於ける父親の責任

一記者

一家の整理や又は兒童の教育などに就て、母親の責任と云ふ事は、新聞雜誌其他到る處に説かれたので、世人は母親の責任といふ言葉に對して、さ許りの感興と注意を拂はないやうになつて來た傾向が見えるやうであります。然し母親の責任は何度繰り返されても之で充分であると云ふ事は絶體にないのでありますから、母の責任は益々高調されなければならぬ大切な事柄であります。然し私は母親の責任と共に、それと同じ程度に父親の責任といふ事も論ぜられねばならぬ事ではないかと思ひます、兒童教育と云ふ事は家を守れる母親の手に多くを待たなければならぬ事は明瞭でありますけれども母親許りの手に任された兒童と、父親も及ぶだけの注意を拂つたものとの間には必ず大なる差違があるに相違ありません。

一體世の中がだん〳〵忙しく世智辛くなつてまゐりますと、家庭は種々なる方面から破壞され易いものでありまして、例へば時間の上から申しましても父親は朝早くから外出して其職業に就き、夕方か又は夜分になりまして漸く歸宅する事となり、主婦も種々雜多の用に一日中暇がないと云ふやうな狀態が年々烈しくなつてまゐります。それですから夫婦親子の間でもゆつくり談話を交へて居る時間がなくなるのであります。斯樣に多忙な生活を送る事が幸であるか不幸であるかは別問題と致しまして、かう云ふ生活を送らなければならぬ現在の世の中の有樣であると致しますならば、斯る間に處して比較的多く家庭の和樂を謀り、向上發展の素養を作つてゆくといふ事は誠にむづかしき事かも知れませんが、然し何とか工夫をこらしてまゐらなければ、吾々の生涯といふものは實につまらぬ情けないものになつて仕舞ふだらふと思ひます。私はかゝる仕事が父母兩親の共同の責任であるにも係らず從來母親の手にのみ

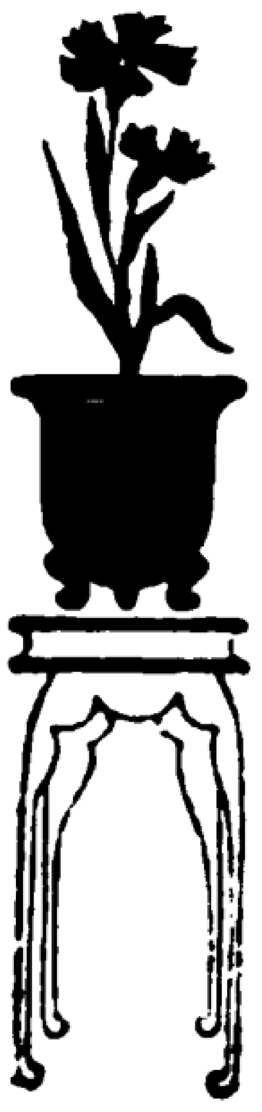
任かされて、而もさう云ふ傾向が益々甚だしくなつて行くのを見て大に注意しなければならぬ事だと思ふのであります。

世の中の進步は分業の制度を益々發達させてまゐりまして、家庭の經營も從つて分業的になつてまゐり、夫は外妻は內と、お互に自分の務とする事に許り從事して、他の事は一向解らぬといふ事がよく外國の家庭にはある樣子で御座います。斯る家庭に於ては兒童に對する母親の感化はありませうけれども父親の感化は全然なからふと思ひます。兒童教育は父母の兩方からの善良な感化があつてこそうまく參りますもの、母親からは優美、溫和、同情と申す樣な德の感化をうけ、父親からは剛氣、克己、忍耐などの感化を受けて兒童の品性性格は形造られて行くのであります。それを兒童の上に父親の感化が及び得ない事情があるならば兒童にとりてどれだけ不幸であるか解らぬと思ひます。

日曜日に珍らしくも父が家に居るのを見て、子供

が、あの人は誰ですかと母に尋ねたと云ふ話を米國の雑誌で讀んだ事がありますが、現在自分の父を知つてゐない子供があるかと私は驚いた事であります若し此家庭にして、父の出勤前の三四十分を子供と共に過す習慣をつけて置きましたなら、かゝる悲劇は起らなかつたであらふと思ひます。父も子供の愛らしい無邪氣な顔を見て一層の慰安と勇氣とを得て其日の仕事にいそしむ事が屹度出來るに相違ありません。家庭は母親許りのものでなく、同じく父親のものでありますから、父親としての注意責任を充分に盡すべきだと思ひます。

▲父親にとつては家庭は一つ休息處で避難所であります。一日の奮闘に疲れた身體を横へて更に明日の戰鬪に出かける勇氣を養ふ處でありますから、家庭の種々なる些事によりて休息の時間を奪はるゝ事は實に苦しい事であり又其家庭にとりても得策ではありません。私は家庭に於ける父親の責任と申す事を述べましたが、然し之によりて累を父親に及ぼし、且つは不愉快を買はしむるに至る如き事があつては益々家庭の和樂を殺ぐ原因でありますから、此間に處して主婦たるものゝ手腕を充分に要求しなければならぬと思ひます。私は何處の家庭にまゐりましても、父親の感化のない處では、何處か間の拔けた、しまりのない樣子を見るのでありますが、然りとて餘りに多く父親が干渉する家庭、又は干渉せねばならぬ家庭も同じ樣にあはれなものだと存じます。要するに父親も母親も、各々其責任を自覺して、互に愉快なる思慮を費して居るのが、理想的な家庭だと信じます。



摘草集

避暑戻りの注意

醫學博士　弘田長氏

▲避暑地に居れば勢ひ盛んに運動する樣になります、處が家庭に歸ると却々爾うは往かず、多くは運動する場所が田舍の樣に得られませんので、自ら運動不足を訴へる樣になります、故に親達は此點に向つて充分注意を與へ、公園へ連れて出て自由に遊戲をさせるとか、或は何か趣味のある適宜の運動法を取らせないと、自然食物の消化に影響し腸胃を害する恐れがあります

▲運動に次いでは飲食物の注意です、避暑地に在つては、思ふ樣に好きな食物を得られませんが、然し子供も田舍へ來たと思へば粗食に甘んじて、別に贅澤も言はずに居る、處が久しく田舍に居て東京へ歸つて來ると、見るものは悉く美味美食のものばかり、果實屋の店頭を見ても又菓子屋へ入つて見ても、兒童に取つて垂涎禁ずる能はざる珍らしいものばかりです、然し是等は親達の注意に依つて必ず手加減は出來ましやうが、夫れにしても家庭に歸れば避暑地に居た時よりも、自然飲食物を自由に得られるから、知らず識らず過食する樣になります、之れは親達が充分警戒して居ながら往々失策を醸す事があるから、特に此點に向つて注意を要します。

▲尤も飲食物に對する材料の點から云へば、新鮮なるものを得られると云ふ利益はあつても、過食して下痢でも起させては却つて困ります、夫れから尙一つ茲に注意して置きたいのは、氷水を飲ませる事で、避暑地に在つては思ふやうに氷水を得られなかつたものが、東京にては容易く家の附近にて得られ、所謂鼻先きへ旨い物を置かれるやうな譯ですから、此邊の事は親が能く斟酌して、氷水に代用すべき飲料でも作つて置き、適當に與へたら宜からうと思はれます

胃腸と食物

醫學士　野田太市氏

▲果物の注意　果物には種々の黴菌が附着して居ますから下痢は起し易いものです。殊に夏蜜柑の類などは酸を含んで居て此酸が下痢劑として働くから一寸でも胃腸に異狀の有る人や溜飲などの有る人は決して食はぬがいゝ、これも牛乳と同じく空腹に悪いから食後が一番良い。常に便秘する人は食ふ方がいゝ。これは別の話で有るが世間では蜜柑や何かの種子を飲むと其が原因で、盲腸炎を起すなどいふて居るが途方も無い間違である、決してそんな事はないつまり果物に就ての注意は古いものを喰はぬ事です、殊に皮の無い物を食ふ時には良く撰擇する事が必要です。

▲野菜の注意　野菜の纖維は腸の粘膜を刺擊して下痢を起す事が有るから注意せなくては成らぬ。殊に葱を初め菜葉や大根には十二指腸蟲の幼蟲が附着して居るから良く煮て喰はなくては成らぬ。さて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

十二指腸蟲の話であるが、此蟲は前にいつた野菜類に居て生長して幼蟲となり飲食物と一所に吾々の體内に這入つて肉眼で見らるゝ程に成長するので有るが、御承知の通り此蟲は吾々人間に最も必要な血を吸ひ取るので久しく十二指腸蟲が付いて居ると貧血症を起す、然して夫れ以上長く捨てゝ置くと此蟲の爲に血を製造する機關を害さるゝ爲に惡性貧血症となつて遂に全快の見込みが無いやうに成つて一命を捨てる樣な事になる。そんな工合で仲々油斷のならぬ蟲で有るが困つた事には此蟲は口から這入るばかりで無く爪の間や皮膚からドシ／＼這入て行くだから十二指腸蟲患者は土仕事をする百姓や鑛夫に多くて都會の人に少ないで地方の人に限で土仕事をする人は手や足を餘程良く洗はなくてはいかぬ。何にしても時節柄注意す可き事だらうと思ふ。

▲有害物を食したる時の注意　さて如何ほど注意して居つても誤つて有害物を飲食する時が有りますから其時の注意を一寸御話しましやう、例へば腐敗した魚肉など食ふた時などは其中にプトマインといふ毒が有る爲めに捨てゝ置くと急性の腸加答兒を起します、若し夫れを食ふた時に自分で氣が付いたならば口中深くへ二本指をいれて吐くが一番良い方法です、そして吐いて終つたらば、鹽湯を呑んで又指を入れて吐くのです、然すれば恐るべき病を未發に防ぐ事が出來ますが、捨てゝ置いたり、手當もせずに醫師の力を待つて居たりなどすると遂に取り返しの付か無い樣な大難に出會するのです。

道具の使ひ方

私共では如何な料理でも薄刀、出刀、刺身庖刀と此三つで間に合せます。

菜切庖丁は例外で御座いますが、庖丁は使つた後で一々奇麗に拭ひ、一寸火にかざして焙り、布巾で卷いて置けば錆は決して附きません。

日本料理の鍋は唐金が一番宜しう御座いますが、使つた度毎に叮嚀に拭つて仕舞ひませぬと、白味が剝れ易いもので御座います。又新らしい鍋を使ひ初める時には蟲を尻へ塗つて置きますと、大變煮にが早う御座います。

新らしい漆器の臭ひを去るには、豆腐粕を詰めて二日程過ぎますと、すつかり拔けて了ひます。

御櫃の新らしいのは、熱湯を度々通しますと、早く枯れて來て宜しう御座います。

凡て道具の使ひ方には、かう夫れ／＼心得がありますから、一通り呑み込んで置かればなりません。

獨逸女學生の晝寢

早稻田大學講師　藤山治一氏

獨逸では夏でも冬でも皆食後に晝寢をいたします。尤も時間の許さない勞働者や、非常に忙しい人はさう云ふ譯に行きませんが、普通の家庭では、子供は別として老人も若い女も皆晝寢をします。殊に學者などは頭を使ふことが多いから、晝食後三十分乃至一時間は必ず晝寢をします。ですから獨逸では晝食後の一時間は訪問することを避けます。晝寢がすむと、一家中集つてコオヒーを飲みながら

いろ〳〵面白い話をして、それからまた仕事に取掛ります。夕食は七時で、床につくのは十二時頃です。朝は九時より早くは起きません。尤も氣候のせいで、さう早くは起きられないのですが、何しろ九時間は眠ります。そしてその上晝寢を一時間ゝするのです。だから一日に十時間も眠るわけです。學校でもこの通りで、別に晝寢の時間を設けてはありませんが、食後二時間の休憩があつて、寢たいと思ふ人は勝手に寢てもいいことになつてをります。殊にベルリンあたりの女學校では、學生は皆寄宿舍に入つてをりますから、食後は自分の部屋に入つて晝寢をして、時間が來るとまた教場に行きます

日本人はよく晝寢をすると頭が重くて、身體がだるくつて、一日中不愉快で仕事ができないといふ人がありますが、私は長らく獨逸にゐて習慣になつてゐる故か、食後晝寢をするとき大層頭がよくなりますだから學校にゐても、食後は必らず椅子によりかかつたまま眠ります。時時用事があつて寢ることができなかつた日は、終日眠くつて頭がぼんやりして、イヤな心持がします。

私は晝寢の利害といふことを考へて見ると、利があると思ひます日本でも時間が許すならば、婦人も晝寢をする方がよいと思ひます決して不行儀ではあるまいと思ひます。（婦人世界）

學校着としての洋服

家着としての洋服は、坐るにしても下駄を穿くにしても、日本家には不適當なこともありますが、學校着としては理想的だと思ひます。

學校に行く位の子供の着物の、一番に汚れる所は、前から裾に近い方でありますが、膝きりの洋服ですと丁度その汚れる所が、靴下になつて居りますから、汚れのズツト違いのも重寶で御座いますし殊によいと思ふのは、朝着せて出しました着物は、子供がどんなに學校で飛びまはつて歸りましても、胸があくとか下がるとかいふやうなこともなく、キチンとそのまゝでゐることであります。子供のためにも、それ袴が下がる、何がどうなるといふやうな氣遣ひなく思ふまゝに運動の出來るのは、どんなによいことだか知れません。

私共の子供は先頃まで、洋服ばかりで學校に行つて居りました。その頃は私も袴をはきたいなど丶ものずきから時々申して居りましたが、此頃衣物の方の都合から已むを得ず和服を着せてやりました所、袴は短くはいて居りますけれど、袴があつち此方に引つかゝるから嫌だと申します、身輕な洋服を着つけたものには、餘計に袴があちこちに引つかゝるやうな氣がするのでありませう。

洋服はぢきに小さくなつて仕舞ふから困ると云はるゝ方もありますけれど、それは市中に賣つてゐる、無理な儉約をして裁つた洋服のことで御座います。丈けもまはりも大きくなることの早い、一二歳の幼兒は別として、幼稚園に行く位からの子供でありましたなら注意して拵へた洋服は、唯裾の縫ひこみを出す丈け位の手入れで、一年中から二年たつぷり位は恰好よく着られます。西洋でも子供の服は全體のつり合さへとれてゐれば、稍ゆつくりと作るのが普通になつてゐるといふことで、その稍ゆつくりしたものが暫くすると丁度よいものになり、また半年もたつと、ゆきが短くなる位で、別に窮屈なこともなく、また隨分着られるのです。一月も着通すとほどいて張つて、また縫はればならぬ日本服とは非常な違ひで御座います。（婦人の友）

隨感

家庭に於ける青年の取扱

安井哲子

△どんな家庭でも兒童に對する注意は大分行き届いて此方面の研究は益々行き届いてまゐりましたが、青年男女の取扱はまだそれ程に注意されてゐないやうで御座ます、然し之は非常に大切な事で、其人の運命を直接に支配する時期で御座いますから、各家庭では青年の取扱といふ事を研究しなければならぬと思ひます。

△子供がだん／＼成長するに從つて思想も發達し來り、父母兄弟の考とは各自別樣の思想意見を持つ樣になりますから、自然各自了解のない間柄となり、從つて寂寥を感じてまゐり、家庭以外に娯樂を求むる結果、往々にしてよからぬ道に陷るといふ事になるのであります。

△人には個性があります以上、如何に親と子と申しましても、素より全然同じ思想を持つ事は不可能の事でありますから、この違つた思想、傾向、趣味を一家に集めて、それを適當に調和あり理解ある樣に仕向けて行く事が、一家の夫なり妻たるものゝ大切なる責任であると思ひます。

△先づ其爲には家庭の隅から隅まで隱くすと云ふ事があつてはなりません。お互が腹臓なく何事でも語り合つて、異見も述べ合ふのもいゝでせうし、或は議論をするのもいゝでせう。自由に無邪氣に眞實な行爲の中には、必ず離るゝ事の出來ない一種の温かい趣きが湧いて來ますもので御座います。各の家庭に若しこの樂しき理解調和さへありますならば、如何に異つた意見思想も、却つて趣味の單調を破つて和樂を複雜にする利益こそありませう。決して家庭

を混亂させる基とはならないのであります。

△それから青年を家庭一つに籠ち込めて、外の空氣にあてまいとなさる家庭もある樣で御座いますが、之は餘りに考へ過ぎた所置であつて、却つて弊害を生じ易い取扱法だと思ひます。其爲に其家庭內にあらゆる娛樂の道具を準備し、子供がほしいと云ふ物は何んでも揃へてやる事が出來ましても、青年と云ふ者は、それだけでは如何しても滿足する事の出來ない者で、禁斷の木の實は得て食べたいもの、讀むな、外出してはいけないと萬事を抑壓すれば、一方に抑えられた處は他の方面に現はれて出てまゐります、青年に對して抑壓的手段を取つた處で、決して抑へ切れるものではありません。夫故私はあまり不適當なものでありませんならば、外出もよし、新聞雜誌もよし、心任かせにさせて置いて、而も其間に撰擇、批評、判斷に就いて相當の智識を養はしめた方が大に得策であらふと思ひます。

△殊に戀愛又は結婚の問題になりますと、お互に秘し合つて、獨りで思ひ煩ひ、其判斷に苦しむ事が多いもので御座います。この問題は打ち開け難いといふ傾きがあるかも知れませんが、然し斯る事は其一人だけの問題でなく、其結果は或は全家族にも及ぶ事がまゝあるので御座いますから、各々が同情を以て斯る問題に接し、思慮ある判斷を與へてやる事が肝要であります。私は斯る事までお互に打ちあけて兩親なり兄弟なりの意見を求めるといふ家庭の空氣が誠に好ましいと思ひます。若し斯くの如き空氣が其家庭に流れて居りますならば、寂寥、不理解などは跡形もなく消ゑまして、家庭は常に青年の樂園となる事と信じます。（談）

所謂現代的女性

一記者

△新らしい時代の女には新らしい精神がなければならぬ、新らしい精神のある處には古い型が破れて行く。昔は女は弱い者と定まつてゐたが、所謂現代的

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

女性は、何故に女許りが男の下に虐げられて、弱者の名を甘受しなければならぬのか、男こそ女の前には弱いではないか、最早男にいぢめられて居る時でないとは所謂醒めたる女の言ひ草である。

△姑と別居する事が結婚の條件に加へられる世の中である、勝手に自分を産んで置きながら、今更孝行をしろとは理不盡だと云ふ娘も出來た。妾は如何して夫の放蕩をなほしたかを麗々しく寫眞迄いれて雜誌に書き立てる妻君も出來た。私見たやうに子供が多くては、何はとも角、自分の身が立ち行きませぬと云つて、可愛らしい子供の前で子供を呪ふお母さんも出來た。ラブはビジネスである、結婚の申し込みに對しては、先づ第一に相手方の月收いくらを問ふが肝心だと主張する女學生も出來た。天下に私の良人たる男子ありやと呼號する女浪人も出來た。もう澤山だ。

△如何なる世でも新らしい傾向があると、議論が二つに分れる。一方が保守主義、一方が進歩主義と名づけられる。所謂現代的女性の問題についても、「女の僻にいき過ぎた」とけなしつけるのが前者である解放だ自覺だとはやし立てゝ大にやるべしとおだて上げるのが後者である。どつちもあまり怜悧でない。

△留めてやむ位な勢なら、何々主義などの議論はいらぬ、止まぬ勢を抑へやうとするのは初めから愚である。されぱと云つていくらおだて上げた處で、餘りに突飛過ぎては、道行く人が鼻をつまむ、眞面に見る事も御氣の毒なと思ふ樣では、折角醒めたる女も御自分で耻しからふ。女は愛せらる可きもの（と云つたら．早速又睨まるゝ事であらふ）、すさまじきものに數へられては、此世に女性の立ち場がない、何うせ新傾向の先驅には犧牲の血が必要だとあれば默つて引き下る迄の事。

△男と女きりゐない世の中、いぢめたり反抗したりして暮らすのは不愉快な事である、仲のよい友達となつて助け合ふ樣に造られて居るのだ。價値ある友人が欲しい。吹けば飛ぶやうな友人はなくもがな。

編輯だより

△例年八月は東京がからになると申しては大袈裟ですけれど、教會も平生の半分位の集會で御座いますし、お友達の誰れ彼れは、お國やら避暑やらで、大層寂しくなるのが例で御座います。今年は安井主筆は何處へも參られませんでしたが、海老名主幹の御家族は擧げて相州さ子に避暑なされ、元良博士御夫人も御子息と共に鎌倉附近で夏をおすごしになりました。居殘りを餘儀なくされた記者は、寂しさと忙しさとを身一つに背負つて、あれこれと氣をもみましたけれど、例の通りの鈍骨、御申譯のない事で御座います。

△海老名御夫人、元良御夫人からのおたよりは、避暑地よりと題する中に收めて置きました。不幸にして海老名御夫人の方には御息女の御病氣のため、思ひもかけぬ苦しい避暑になりましたけれど、今月末には無事御歸りになる事で御座いませう。

△暑い夏のお留守居役の小生にもいろ／＼嬉しい事がありました。まづは前橋の野口御夫人に御面會致しました事、藤岡の和田信次君と一晩を語り明す機のあつた事、ゆきあたりばつたり集の內ヶ崎作三郎氏の御歸朝をお迎ひ致す事が出來た事、朝鮮人牧師の觀光團を歡迎しました事なんど。

△もう朝夕の風の色が秋がゝつてまゐりました。これからは特に私共の世界一層勉強致しまして皆樣の御同情に酬えたいと望んで居ります。

△原稿締切は毎月十五日限り、東京小石川林町四十三番地新人社宛に御送附を願ひます。

本誌定價（一部金拾錢（郵税共）◎六部半年分前金六十錢（郵税共）◎壹ヶ年分十二部前金壹圓拾錢（郵税共））

外國行定價（壹部金拾四錢（郵税共）◎半年分前金八拾錢（郵税共）一ヶ年分前金壹圓六拾錢（郵税共））

一行廿七字詰	四分ノ一頁	半頁	一頁	內表紙拾二圓
金廿五錢	金三圓	金五圓	金拾圓	外表紙拾八圓

●斷因引續き御掲載の向へは大割引可致候
●本誌代金は總て前金に御拂込み被下度候
●振替口座にて御送金の時は手數料壹錢必ずそへらるゝこと
●郵券代用は一割增の計算にて御送附被下度候

通信、爲換、寄贈雜誌等は必ず發行所宛に願上候

明治四十四年八月二十八日印刷
明治四十四年九月一日發行

發行兼編輯人　東京市小石川區林町四十三番地　海老名彈正
印刷人　東京市小石川區丸山町四番地　相原一郎介
印刷所　東京市赤坂區田町五丁目十一番地　齋藤活版所

發行所　東京小石川區林町四十三番地　新人社
（振替貯金口座一四〇〇五）
（電話番町二五四四）

ライオン歯磨
慈善券

第拾回決算に付愛用諸君に謹告

一金貳萬壹千九百八拾九圓八拾九錢貳厘
但自四十三年一月至同年十二月滿一ケ年間ライオン歯磨小袋貳千百九拾八萬九千八百九拾二袋賣捌に付此慈善券總金額

内金九千貳百參拾八圓八拾錢參厘
但同上年間ライオン歯磨慈善券付空袋九百貳拾參萬八千八百〇參袋引換金額

差引々換殘額金壹萬二千七百五拾壹圓〇八錢九厘

ライオン歯磨が現代理想的の製品として一般御需要者の嗜好に適し其製販額の益々饒多を來すと共に小袋入添付の慈善券より生ずる金額も亦豫想外の好成績に進み昨年度の如きは前年に比して約三千圓の增加を見るに至りたるは全く愛用諸彥御同情の賜に外ならずと感佩罷在候然れ共猶遺憾に堪へざるは慈善券の發行高と其引換金額と相去る甚だ遠き一事に御座候、因て四十三年十二月限りの慈善券引換期限を九月十五日迄延長し以て出來得る限りの好果を收め弊店が當初の希望を貫徹仕度候に付同券付空袋御所持の諸彥は此際至急本支店に就て引換の勞を執られ度く猶斯くても引換の完了を見るに至らずして自然廢棄に歸すべき分の金額は愛用諸彥の御高見に隨ひ適當なる事業に貢献致度候希くは此方法に就ても十分の注意を拂はれ九月十五日を期して東京本店宛續々御高敎を垂れ給はん事を弊店は之に依り第拾囘の決算を了し以て其明細を報告し各位愛顧の萬分一に酬ひんとするものに御座候

明治四十四年八月

東京市神田區柳原川岸
ライオン歯磨發賣元
小林富次郎敬白

支舖
大阪市東區博勞町
名古屋市南區傳馬町
清國 天津、漢口、上海

最も貴重なる智識を最も單純に意得し得るは本會の有する最大特色也

女子手藝講義錄

普通科
高等科
一ヶ年終了

會員募集

手藝の素養なき婦人は文明の婦人たる資格を有せざる人なり

少額の費を以て家庭に最も有効なる手藝の最新智識を完全に修得せしむるは本會の講義錄也講師は斯道の大家四十名世界の技術と最新の流行と最新の考案を最新式の說明法を以て簡易に講述す

共立女子職業學校
櫻友會內手藝普及會編

無料進呈 入會規程 內容見本

圖解入（每號石版彩色木版數十個入）

質疑 會員の質問は最も丁寧に應答を示す

會費

普通科	一ヶ月	金参拾銭
	半ヶ年	金壹圓七拾銭
	壹ヶ年	金参圓貳拾四銭
高等科	壹ヶ月	金参拾五銭
	半ヶ年	金壹圓九拾九銭
	貳ヶ年	金参圓七拾八銭

社交上精神上家政上の成効を希望する婦女子は速に入會せよ

入會申込所
東京日本橋 大倉書店

入院診斷後應需

松田、林、峰間、三副長は目下當院に在勤

電話（本）八八八（病院用）
八九八（私宅用）

東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋南

院長 醫學士 高田畊安

相州高座郡茅ケ崎町海濱從停車場半里

南湖院

電話ちがさき二番

河野、高橋、兩副長は目下當院に在勤

但 院長渡歐中 副長代理す

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

毎月一日一回發行

明治四十四年九月一日發行第參巻第九號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN